

不埒物語翻刻

内	本	咲
田	多	本
保	亜	英
廣	紀	恵

はじめに

解題と挿絵部分は来年度の紀要に投稿することとし、ここでは簡単に本書を紹介し、翻刻に至った経緯と動機、凡例などを記す。

本書は未翻刻で、『佛鬼軍』や『無明法性合戦状』『強盗鬼神』の系譜をひく作品である。また、『根無草』や後の草双紙に出現する、地獄の鬼や閻魔の滑稽描写に至る作品でもある。談義本であり、狂講の一面を表すとも見える。内部に描かれる廓を中心とした遊興風俗は最終巻の「制札」に集約され興味深い。特にこの「制札」には埋め木による墨消が施される本と、簡略な墨消と埋め木以前の文字記載を保つ書物とが同一刊記で存在していることなど、注目を要する。

本書翻刻の目的は、資料的価値の他に、比較的読みやすい版本を利用した変体かな読解の教育システムを構築することにもある。その点については、来年度に詳述する予定である。こうした作業のため、システム部門を担当する本多亜紀が全く初めての経験になる翻刻作業に携わり、本書巻一の一部を担当した。多くの部分は本学文芸学部助手（日文研究室）の咲本英恵が翻刻した。巻二、三、四、

五は彼女の手になる。巻六、七は内田が翻字を行った。校正は咲本と内田が各々行ない、両者を校合した。

慶應義塾大学文学研究科の授業でも本書を取り上げ、博士課程三年、星瑞穂。修士課程二年中原由美子、修士課程一年、川端悠介、服部徹也、上野文裕の諸君が受講し、もっぱら読み下しと簡単な注釈を行った。

底本

本書の翻刻は、架蔵本を底本とし、フランス国立図書館本によって架蔵本の欠巻、巻四を補った。同一刊記の異板、慶應義塾図書館本を参照し、異文は注記した。挿絵は巻四以外は架蔵本、巻四はフランス国立図書館本と慶應義塾図書館本によって補った。なお、慶應本の挿絵にはフランス国立図書館本との違いはなかった。

凡例

書体などはなるべく使用されている書体に近い書体を用いた。以下にその例をあげる。

爰にはすべてはウ冠があるが通行書体にした。

違の異体字「之繞」に「麦」は「違」とした。

霊の異体字「ヨの下に大」は「霊」とした。

異の異体字「己の下に大」は「異」とした。

往古は往古に統一した。

泰山王と秦廣王の秦、秦は同一文字で書かれており、秦に統一した。

「射」を「躬」と表記するがそのままにした。

作品に特有の造字はその形を表せるように表記した。

促音の「っ」を小文字でしている箇所はそのまま残した。

明らかに小文字が使われている部分はポイントを落として表記した。

「。」「」は併用されており、「。」はそのまま、「」は「、」で表記した。

卷七十八丁表の「Ⅱ」による見せ消ち部分はフランス本架蔵本では墨塗でかろうじて読みとれる部分、慶大本では板木から削除されている。なお「」によって補った部分は慶大本の修訂。

なお、[googlebook](#)に慶応義塾図書館本が公開されている。

不埒物語序

佗しかりき賤か臥家の
破れ窓より凍行月を
ながめて假寝かねし

折からは是もひとり

竈のほそき煙りをさへ

たてかねし同匹の」序1オ

あり野辺の露ふく

むしの声くぐに枕を

はなれて予か宿りに

来り夜もすからの

物語を書集前後の

ふつ、かなるを其俔に

不埒物かたりと題して」序1ウ

拙き筆をとりて七巻と

なしぬ誠に古知の作書

術数は言説の当理

むべなるべし是はまた

身の甲に似せての

愚文なれば廣才の人々

譏る事なかれ」序2オ

武陽之隠士

南啓堂梅翁著

印 印（當榮）

梅隣堂

玉泉 印」序2ウ

不埒物語卷之一

○黒縄王位を譲せ給ふ事

附 十王の事

○三惡の都 普請の事

○閻魔御即位の事

附 移徙の事

斎日の事

○大王御酒宴の事

附 饗宴三國物語の事」3オ

（半丁空白）」3ウ

黒縄王御位をゆづらせ給ふ事

夫故人曰其身直而影不屈

政 糺而無亂國云々爰に一百三十

六地獄の惣追罰けうくわん大王に八代黒縄

大王と申奉るは政道たゞしくましますゆへ

死出の山に吹風枝をならさす血の池の波靜

にして罪人の訴もなく目出たき大王にて

わたらせ給ふしかるに王子十人おはします」4才

第一の王子は秦廣王第二は初江王第三に

宗帝王第四に五官王第五の王子を烟魔王

第六變成王第七秦山王第八平等王第九

都市王第十転輪王と申奉りて是を則

十王と称し中にも第五の王子烟魔は。と

りわき御愛子にてわたらせ給ふある時父大王

の御前へ王子達を初めとして左右の大臣

俱生臣觀日觀鼻両大臣その外家子郎等を

召れ勅定ありけるは我いやくしくもけうくわん王」4ウ

より今八代のあとをたれ萬鬼のまつり事

おだやかにして獄卒罪人のあらそひもきかず

七宝蔵にみちみてり此うへの望なし功なり

名とげて身しりぞくといへる古人の言葉に

まかせて我か金冠を烟魔に譏惣追罰と

なし残り九人の王子どもへは六道錢十萬貫を

宛行べししかるうへは萬事炎広が下知を請

昼夜油断なく決断所へ相詰罪人の輕重を

不埒物語翻刻

糺しずいぶん忠勤をはげむへしとの綸言」5才

ありしかば俱生臣を初めとして伺公の面々

勅定のおもむきつゝしんでうけ玉りおのく

同音に是はめてたき御事かな九王子達の

御事も録十萬貫の御分地とならせ給ふ

うへは何の御ふそくかあらん元來炎魔様の

御事は御年齢と申し御器量御骨柄

すぐれさせ玉ひ御眼力つよくましめて

三界の善惡唯一目に見ぬかせ給ふべし

かゝる王子様にてわたらせ給へは惣追罰の大王と」5ウ

あふき奉りてあつぱれるなるへしと恐いりて

奏しければ大王御感甚しくさあらば

なんじらよきにはからふへしとて御簾の

中にいらせ給へはおのく悦びのまゆをひ

らき吉日をゑらみて近々御即位ある

べしとて宿所くへ帰られしは

ゆゝしかりける事ぞかし

三惡の都新殿普請の事

斯て御末の御弟転輪王の御屋形へ御連」6才

枝を初めとして俱生臣見るめかぐ鼻両大

臣各々しんおのくさんくわい參會ましかいまし／＼て御即位ぎょけいの良辰りやうしん
 又はいづれの御殿ごてんへ移し奉らんと面々めんめん
 評義ひやうぎまち／＼なり御舎ぎやうしやう兄秦廣王あへせ仰ける
 やうはまづ／＼御即位ぎょけいの吉日きふくを撰む事
 おつてそのさたあるべしとかく此たびは
 あらたに御殿ごてんを飾新殿しんてんへ移し奉りて
 御即位ぎょけいの規式ぎしき執行しやうぎへし去ながら方角ほうかく
 地形ちぎやういづれの地ちかよろしかるへし各々おの／＼」6ウ
 いかにとの玉たまへは時に饌鼻くわはなす、み出て申やう
 幸さいわい成かなよろしき地あり死出しでの山の谷中たになか
 よりほそくながる、ながれのすへさいの川原かはらに
 つゞきてかう／＼たる景地けいちあり殊更ことさら此所このところに
 名井めいありて水の清淨ちやうじやうなる事水昌すいしやうの
 ごとし此地このちはむかしより地蔵ぢざうの領内りやうないたりと
 いへどもいまは地ぞうも此地このちに住すましてさいの
 川原かはらにちいさき草庵くさのいほをむすびてあるか
 なきかのすまひのよしなれば此地このちを地蔵ぢざうに」7オ
 乞請こいうけ此こところに新殿しんてんを建立こんたうすべし此義このぎ
 いか、と申しける見るめの大だい臣申しんやうさりながら
 地蔵ぢざうを他方たはうへつかはさん事西方さいほうへのきこへも

いか、なれば此たびかれにはすこしき別殿べつてんを
 しつらいてさしおかれば浄土じやうどのとりさたも
 よろしかるへしと申ければ皆みな一同いどうに尤もつともく
 さあらはかの地くつきやうなりとてすてに新殿しんてん
 宮殿くうてん繪圖えず差圖さずこと／＼く調とければ三悪さんあく
 六道くわうだうぞ、めきわたつて居石柱板瓦釘鉄物すへいしはしらいたかはうぎかなもの」7ウ
 其外そのほか糧米りやうまい堂だう建具けんぐにいたるまで三悪さんあく城下じやうかの
 貴賤きせんとなく我も／＼と我慢かまんをおこして
 まけじおとらじ車くるまに積つみて牛うしをかけかね
 たいこを打うちならし六道くわうだうせばしとさ、げ物毎日まいにち
 引ひもきらざりけり扱又賤さくまたしんの賤おしの敷めは思おもひ
 おもひの装束そうぞくして鋤鋤すきくわを携たづさへて罪人ざいにんを
 落おしいるへき穴あなを掘ほやら埋うめるやら埒らちも差
 別べつもなかりけり又その中なかにも足あしよはなる
 老若男女らうにやくなんにやうひとつになつて手々て／＼に小こざるや」8オ
 8ウ9オ挿絵あかづち
 もつこにて赤土あかづちくろつち泥どろまひれ持もちはこび
 つみかさね地形ちぎやうをならす声々こゑ／＼に千本せんぽんつき
 のその声こゑはさながらうんかのごとくなり爰こゝに
 またその名三悪さんあくにかくれなき死出しでの山の手に

あほうらせつといへる富貴のもののかれめは

いまた一しなも献ぜざる所に此たび地形

棒突の御ためとて鉄棒千本車につみて

いかめしげにこそひかせたり此ときの鉄の棒

今にいたりてながく罪人呵責のためとなる事は」9ウ

あつはれきたいのさ、げ物やと目をおどろかす

ばかりなりさてもそれよりも段々つまかさね

たるその土は高き事百丈ばかりの山となる

此山にも槐檜樅柅我もくんと植ければ

枝をたれ葉をならべたちまちへんじて剣と

なる是によりていまの世にいたるまで剣の山

とぞ申ける斯てその高さ十由旬の

玉樓新殿きらひやかに地蔵のくうでん

美を尽しことく終りしかば朝日に」10オ

か、やくばかりなり

炎魔大王御即位御移徙の事

干時炎王元年正月十六日王子移徙なし

奉り則炎魔大王と尊号し百くわん

けいしやう敬ひたてまつり遠近の諸侯珍物

きくわんさ、げける大王悦感限りなく

不埒物語翻刻

さて勅定ありけるはこん日最上の吉日なれば

此後此日をもつて斎日と名づくべし今日

朕が即位のしうぎとして地獄餓鬼畜生」10ウ

の三悪を残らす一日一夜かあいだいかなる大罪人

たりといふともかしやくを免許あるべきよし

偷言ありしかば俱生臣うけたまはると

筆おつとり鉄札のおもてに偷言のおもむき

逐一に是をしたゝめて速疾鬼といへる外道に

わたされければかしこまつて候と粟飯か

しくそのほどに一百三十六地ごく裏々地借

店借まで残さすもらさずふれまわれば

獄卒罪人ぐその鶴の声々いちがんの亀」10の15オ

も浮木にあつかるかごとくふしぎなるかな

かゝるめでたきくわんゆうの御代に生れかく有

がたき御下知かなとぎゝめきわたるこゑくに剣

の山も動くづる、ばかりなりさてそれよりも

獄卒罪人ひとつになつて野がけ敷入たもと

ゆたかに初けしきおさまる国のしるしなり

大王御酒宴の事

斯て大王は焦熱殿に御幸ましくければ百官

万鬼袖をつらね異儀をたゞし席をもふ」10の15ウ
 けてなみいたり大王の御前には四季のほうらい
 のしこんぶこくどのくわしにいたるまでさしにも
 ひろきせうねつてんひざをいるべき所もなし
 時に大王御かわらけをはじめ給ひしだい／＼に
 小車の種々のゆふらんおもしろやつつもの、
 まじはりたのみある中の酒宴かなとうたひ
 かなで、ことぶきけり爰に藤原の右大臣
 饌鼻す、み出て玉座にむかひしやくとり直し
 つつしんで奏しけるは誠に以て君此たびの」16オ
 16ウ17オ挿絵

御即位千秋萬歳限りも御さなく目でだき
 御事言説につくしがたし去ながら今君は
 三悪六道の惣追罰大王の御位にして
 御威光六道にか、やき草木もなひくと申せとも
 誠に国あつて禮なし礼あらざれば義もなく
 信もなし抑々天竺まかた国の御あるし淨梵
 大王の御子しつた太子と申奉るは十九才の春
 御位をすへり金銀財宝にもかへかたき五天
 竺にならひもなきやしゆたら女といふ御臺所の」17ウ

妹背をふりすて西てんちくりやうしゆせんといふ
 おそろしき獅子のすむなる山に登てあらゝといへる
 仙人を師匠とたのみ十二年がそのあいた難行
 苦行の功をつみ大聖釈迦牟尼といふ佛と
 なりて因果の道理をわきまへあまねく十方
 の衆生へ生死ねはんといふ事をおしへて
 是を仏道といへり又唐にては伏羲といへる人
 五行八卦といふ事をおしへ神農は草をなめて
 五つの味をさとし五臓に徹して人の病を」18オ
 いやす事をおしゆ又皇帝といふ人は五ぞう
 六腑といふ事を能かんがへて是は則病のやどる
 所にして一身の気機は橐籥のことく
 なりと人におしへて是を醫道と名付さふらふ
 その、ち老子孔子孟子など、いへる人々出生して
 前々よりのおしへ五味五行五臓八卦の道段々と
 工夫をめぐらし仁義禮智信といふ文字と
 なし此五つの文字は人々の常なりとて
 是を五常と名づけたり又忠信忠恕といふ」18ウ
 事を人にしめす忠の一字のりくつを以て是を
 いふ時は主につかふまつるに身命をおします
 みもいのちも

禮をもつはらとして義をはげませよといふ
事なり釈迦は是を不借身命と説りまた

信の一字は朋友によく交老たるをうやまひ
幼少を愛しかりそめにも偽へつらへる

事なきを信といふ想とはおのれにほつせざる

所を人にほとこす事なかれ忠は是物に對し

想は私にあらす人をもつて人をおさむるなど、」19才

おしへ是を則儒道と名付又は律義末法とも

いへり 故に近年王祥孟宗郭巨など、

いへる廿四人のまれもの出てその母をやし

なはんためにひとりの子を穴におとし殺して

此子ののむべき乳味を母にたてまつりて養育

子を埋まんとて穴を掘ば忽黄金の釜を掘

いだし家富榮て母をやしなふ又吾人はその父

老ほれて寒中にとりたての筭をくらはんと

ねだる倅の孟宗も此大雪にいかゞとは思ひながら」19ウ

父のねがひのもだしがたくて箕笠打着て

竹の林にゆきて見ればふ思議や牛角のこつく

なる竹の子を式本みつけれしくおしいたゞ

きとりてかへり是をあつものになして父に

不埒物語翻刻

くらはすれはたちまち病平癒する又氷をた、け
ば堅凍のうへに魚おどるおの／＼父も父たり

子も子たり是もひとへに老孔孟子の教への

ごとく律義末法をよくまもりしゆへにかやう

のまれものもあるなりさてこそ今の世に」20才

いたるまで廿四孝と申はかれらが事をもうし

さふらふ擬日本国にては天竺の佛法唐の

五常律義末法をひとつにくゝりあわせて

ひらがなといふ文字になをし大に和らぐと

書て大和の国とよめりされはこそ大和国は

大日本の中央と定め神明和光正直の道を

たて是を神道とは申候なりしかるに此三悪に

おゐては道もなく法もなしかるかへに餓鬼

畜生国とさみすなんばう口おしき事には」20ウ

おほし召されず候やおそれ入つてぞ奏しける

大王しだいを聞き召れ汝か申所至極せり此うへは

ともかくも汝にまかするのあいだいづれの道

なりとも宜しく建立いたすべしとの勅定

なりしかばかく鼻大臣うけ玉り有がたしく

家のめんぼく此うへやあらんと敬ひ退出

なしにけり
卷之壹終

「
21
才

不埒物語卷之二

○三悪に敷嶋の道ひろむる事

附り 和歌物語の事

大王詠吟の事

○不埒根元の事

○三途川原遊女町の事

附り 高尾婆娑物語の事」1才

(半丁空白) 1ウ

不埒物語卷之二

三悪の都に敷嶋の道廣むる事

其後大王の御前に敷鼻を召れ勅定あり

けるはそもまづ汝は此三悪におゐていかなる

道をと立て丸か心をもなぐさめんとは

思ふぞやきかまほしさよとの倫言あり

しかばかぐはなの大臣つゝしんでうけたまはり

さん候此たび此三悪におゐて敷嶋の道と

申事をとりたて男女ともに歌道にいれ候へは」2才

真意柔軟めりとおそれ入てぞ平伏す大王

此よし聞し召れさてその敷嶋歌道といふ事は

いかなるすじを申そやかたれきかんとの御定なり

不埒物語翻刻

かしこまつて候としやくとりなをしいち／＼次第

を演にけり抑此敷嶋の道と申奉る御事は

大日本国におゐて崇神天王大和国磯城の

瑞籬にの宮にまし／＼て御代をしらしめす

事六十八年めてたき御代のためしをひいて

此御代をいわる奉り敷嶋の道とは申候なり」2ウ

歌は君のしろし召みそなわし給ふ道なれば

哥道ともいへりされば大内をも百敷とは

いわる申候なり百はおゝきと申スこゝろなり

又百敷は百官の並敷居大内なればかくは

申スとの説も候なり往昔雄略天皇の御時

までは百官けいしやうといふ事さだまりし

事も御座なく崇神天皇より此かた

百官さだめられしと候なり万葉集といふ

文には百師木とも書又百城昆ともかきて」3才

是をも、しきとよませ申候なり是までは

たしかにそれと定りし文字もなく唯文字

にかゝわらずこと葉の花の国なるゆへに磯城の

宮の目出たきためしをひきていわる奉る

といふ人の心のおろかしきがすくに日本の風

俗にして是ぞ誠に正直国又文字にか、はり
 字儀をたゞし利にか、はるをは唐の教と
 申候て歌道には用ひ申さず只すらくくと
 人の心のすなほなるをとりて三十一文字を「3ウ
 つらねて是を和歌と申候なりそのうへ哥に
 六義有是は則六道のちまたに定おきて
 六つの色をあらはすものなり上句下句と申ス
 事のさふらふなり上句は十七文字是を又
 五七五の三だんとなす下句は十四もじ七もじ
 七もじ二つにわか上上の五もじは天地の四方
 中央の五行となし中の七もじ七曜破軍に
 かたどり下の五もじは五たい五輪又は五常の道
 となすさて又下の句にわたりて上の七もじ七難」4オ
 即滅下七文字は七福即生是をあはせて
 三十一文字の詠歌とは申候なりいま人代に
 およんで長歌短歌旋頭混本のたぐひさ
 まぐありしかれども今日本國も物ごと
 しやれと申スことを好てくだんの詠歌のみそじ
 ひともしをつめて十七文字となし是を發句
 と名附もてあそび候となり春は霞梅柳

花の中の鶯夏は卯の花ふじの花山ほと、きす
 の一声よりして秋の蟬の声萩萩薄」4ウ
 虫の声々もみちふみわけ鳴鹿の山より
 いて、山に入ル月を詠て歌を讀冬はこ
 がらし時雨降あられみぞれに雪
 氷炭竈のけふりまでいづれか和歌
 俳諧のたねとならざる事はなしと
 べんぜつあざやかにこそはのべたりける
 大王を初めとして一座の面々感に絶
 てぞ見へにける時に大王いちくしだひを
 聞し召れさてく汝は聞しにまさりし」5オ
 廣才のものをかな誠にく爰をもつて
 歌人はいながら名所を知るとはいふなる
 べし去ながら汝何としかかやうの日本の
 風義をばつたへ知りたるぞやきかまほし
 やと勅定あるその時大臣申スやうされは
 にて御座候いにしへ御父大王御即位の
 砌に大日本國におゐて哥道の達人その
 聞へありし北面侍に左藤兵衛尉則清と
 申スものいさ、かの事により浮世を捨て」5ウ

墨染の身となりその名を西行といへりかれ姿

婆の縁つきて此界に來りし折から此法師の罪

の輕重決斷まち／＼にして決定なしがたくお

ほし召れしはらく某が父に御預仰附させらる

其比某若年ゆへかの法師に朝暮念比に給仕

いたしいたわり候によつて歌道のひみつ物がたりなど

いたしそのうへ一卷の書をととり出し是は哥道の

深秘和歌の大事三鳥の傳受なりとて某に

相傳申候此ゆへに敷嶋の道と申事もくわしく」6才

6ウ7才挿絵

ぞんしさふらふなり又發句俳諧と申事は凡

今年百年程いぜん俳諧の太祖貞徳と申ス

ものかれも此土に來りし時先例をひかせられ

某方へしはらく御預け下さる是によりて私宅に

相ともない時／＼發句のしだひ俳諧の付合切字

打越去嫌ひてにおはなと、申ス事の大事を

つたへ申候といへとも時至らざればはまた此事知る人

なし今時至りて大王の御前におめて憚も

なく演所のしたひ斯のことに御座候と奏し」7ウ

ければ大王よしを聞き召れおもしろし／＼是にてさ

不埒物語翻刻

とりのむねのひらけたり幸今日最上吉日移徒

といひ斎日といひさあらは汝哥にもせよ發句にも

あれしうぎにはや／＼一ツ仕れとの偷言にて御機嫌

甚うるはしくゑつほにいりてそ見へにけり饅鼻

其時しはらく思案し

斎日はむけんの釜もぬるむかな

御慶といふてとんだ人魂

妙のはるうてんりんゑの罪消て」8才

かやうに仕是を發句脇第三と申候と恐入てそ

奏しければ大王悦感淺からずしからは丸も一首

和歌をつらぬべし悪敷は汝直てくれよ

いまより後は師と頼べしとの偷言饅鼻大臣

身にあまりての有がたさになみだもこぼる、

斗なり大王しはらくあつて何とこふもあろうか

地獄とてよそにはあらしむねのうち

われとのりゆく火の車かな

とあそばしければ観目の大臣とりあへす」8ウ

七五繩と呵責の繩を引かへて

我が住宿のはるぞめてたき

と詠じければ一座のめん／＼声々にあつばれ

時の歌人^{かじん}やと各々^{おの／＼}敬^{かう}ひ感^{かん}しつゝ唯^{ただ}吞^の々と

大さわざ昼夜^{ちゅうや}をわかたざりけり

不埒^{ふち}根元^{こんげん}の事

されはにやまよふべきは色^{いろ}なり又まよはされまじきは
色^のなり吞^{のみ}へきは酒^{さけ}なり又吞^{のみ}れまじきは酒^{さけ}なりと

いへり炎王^{えんわう}酒宴^{しゅえん}のあまりに鬼^{おに}が娘^{むすめ}の十郎^{じゅうらう}姫^{ひめ}を中宮^{ちゅうぐう}に」9オ

たてゝ色^{いろ}にふけり春^{はる}は死出^{ししで}の山^{やま}のさくらに

日^くを暮^{くら}し夏^{なつ}は三途^{さんず}の舟遊^{しづ}ひに七^{しち}ほうを

ちりばめたる安方^{あほう}丸^{まる}といふ大榎^{おのゑ}船^{せん}に三重^{さんじゅう}の

臺^{うてな}を飾^{かざ}らせ古渡^{こわた}の錦^{にしき}をもつて幔幕^{まんまく}を

張^は水主^{すいしゅ}梶^{しかん}取^{とり}いるひ異形^{いぎやう}の獄卒^{ごくそつ}どもに皆^{みな}みな

いちやうの虎斑^{こふ}染^{せん}の装束^{そうぞく}ろびやうしをふませ

声^{こゑ}を揃^{そろ}てやんらめてたをうたはせ其外^{そこのほか}

あらゆる藝者^{げしや}をあつめ義太夫^{ぎだう}豊後^{ぶんご}時流^{ときりゅう}唄^{うた}

松坂^{まつざか}こへた音頭^{おんどう}とり音曲^{おんきょく}三味線^{さんみせん}琴鼓^{きんこ}弓^{きう}」9ウ

こわいる物まね色々にうかれ玉^{たま}ひて昼夜^{ひるよる}の

わかちもなく大酒^{たいしゅ}淫乱^{いんらん}限りはなし俱生^{くせい}臣^{しん}

を初めとして連枝^{れんし}の面々^{めんめん}観目^{くめ}驥鼻^{けび}

両大臣^{りやうだいしん}さまくゝいさめ奉^{ほう}りしをかゑつて

御勘^{ごかん}氣^きをかうむりあるに甲斐^{かい}なきふ

ぜいなり爰^{こゝ}に又大王^{おうちう}の御物^{ごもつ}に寵^{てう}尻^{しつ}といへ

る小姓^{こせう}あり生年^{しやうねん}つもつて十八^{じゅうはち}才^{さい}生^{せい}れつき

うつくしく心^{こゝろ}ばへもよく朝暮^{あすぼ}ふた心^{こゝろ}なく

大王^{おうちう}に仕^{つか}へて御^ごそはさらずある時^{とき}てうこう」10オ

つくく心^{こゝろ}に思^{おも}ふやうさてく大王^{おうちう}の御身^みもち

中々^{なか／＼}もつてほうらつ千萬^{せんばん}其本^{そのもと}乱^{みだ}れすへく

の御仕置^{しおき}おさまる事はよもあらじ何とぞ

御いさめを申^{まを}あげんと思^{おも}ひつくよりも装束^{そうぞく}

あらため花^{はな}やかに出^でたちて大王^{おうちう}の御前^{ごぜん}にかしこまり

謹^{つしん}で申^{まを}けるは斯中^{かく}上^{じやう}候^{こう}は、定^{さだめ}て某^{それが}悋氣^{しんき}の

やうにもおほしめさせらるゝ御事^{ごじ}も御座^{ござ}

あるべけれどもまつたくさやうの御事^{ごじ}にては

御座^{ござ}なく候^{こう}おそれながら君^{きみ}は三惡^{さんあく}の惣追^{そうつい}罰^{ばつ}」10ウ

の御身^{ごみ}として十郎^{じゅうらう}姫^{ひめ}の色^{いろ}にまよはせ給^{たま}ひて

御まつり事もたゞしからず昼夜^{ちゅうや}をわか

たず色^{いろ}と酒^{さけ}のふたつに御心^{ごこゝろ}をいためさせま

しますゆへはたして国^{くに}をみたさせたまはん

御事^{ごじ}おそれながら鏡^{かがみ}に移^{うつ}し見^み奉^{ほう}るが

ごとししぜん国家^{こくか}をうしなひたまはせ候^{こう}は、

御先祖^{ごせんぞ}代々^{だいたい}御父^{ごちち}上^{うへ}へたいし奉^{ほう}りての不孝^{ふかう}

不義そのうへ御いとおしみ深く思召めせらる、
中宮様ともひとつ御枕の御そひふしも」11オ
なるましかればよく／＼御かんべんまし／＼て
よいかげんに御たのしみ然るべうこそぞんし
たてまつり候御事唯々色も酒も中崩

を御もちい御たのしみましまさば御身の
御養生又は同家の御ためにておはしまし候と
弁舌はあきらかなりこと葉に花をさかせ
つ、思ひこうで奏しける大王此よし聞し

召れ大のまなこをくわつと見ひらき面躰忽に
朱塗のこことく額すじばり瘤々たち」11ウ

御声あら、かにて扱々おのれいま口惜もくろまず
して我に異見は推参至極すでに俱生臣を初
兄弟のものどもまで諫言いたすかしましさに

おしこめてさしおくをはおのれしらずや

おのれらごとき虫どうぜんいけてそのま、

さしおくなら色をかへ品をかへ又もや外よりいけん

諫言耳にさかふてかしましやいこの見せしめ

は見よと取て引寄腕をくつすと引ぬけは

わつとさけびてうせにけりあ、心地よや心地よし」12オ

不埒物語翻刻

12ウ13オ挿絵

是をさかなに一ぱいのまんそれ／＼とありければ
御そば近きおなごとも三升入の大きかづき御前
にこそ持出たり大王につこと打笑さあらば

つげ／＼のまんとてつゞけて三ごんほされ

しは酒吞童子と申とも是にはいかでか

まさるべしとておの／＼舌をぞ巻にけり

扱大王の御面躰額筋張瘤々だち色のあかき

御事は此時よりはしまりて老若なんによ

おしなへてゑんまのかほのあかつつらとは申なり」13ウ

三途川原遊女町とりたつる事

斯ていさむる臣下もなくあまつさへ数ならぬ氏

も筋目もなきやからを段々引上百官の

上にて、国の政道罪人の軽重まで

汝等宜敷はからふへし頼む／＼と大た

わけ埒も性根もなかりけり斯て段々

私用を重し公務を掠まいないもつはらに

とりおこなふゆへ善も悪もさだかならねば

今はひとへに天照御神の高天原にて岩」14オ

戸の中にいらせ給ひ日月の光なきがごとく

大不埒とぞ成りにけり娑婆の縁つきて冥途に
来る遊女ともことくく集置三途川原に

新吉原と名附て五町四方に町どり大ニ階に

格子造り夜見せのあんどんてんにか、やき

三筋の糸にてすが、き引たて其外尺八琴鼓弓

引たてすりたて玉子くと呼声にうかれぬ

ものこそなかりけるさればにや爰にあわれを

とめしは娑婆にてもその名もたかき」14ウ

高尾とい、し全盛ならふかたなきの生れ

つき美しく楊貴妃李夫人もかくやと思ふ斗

糸竹の道はいふにおよばす連歌俳諧その外

諸藝くからすといへどもすぐせいかなる

悪縁やらためしすくなき川竹の身と

うられ来てうきふししげき流の身と

なる前の世のむくいまで思ひやられて朝な

夕なになげき悲しみいかにしてか此身を

うかべ重き罪科ほろぼして早く悪所を」15オ

はなれたき事かなと明暮朝日のによらい様へ

御たのみもふし又は鬼子母神様へもおねがひ

もふし唯ひとすじにねかふ心のしるしかやある

夜宵よりしよぼく小雨も降つれくくなる

折ふしに醫師とも見へつ法師なりける

お客のひとりまかきのもとにた、すみ給ひて

我にひと夜の仮枕ゆるし給へとの給ひて

立入給へはそれよりもあいそめ川も深くなり

である夜のむつことに此御客のあふせには」15ウ

いかに太夫聞給へ斯打とけて逢事もひとへに

すぐせの縁ぞかしさらは何とてつ、みたまふや

とふやらそもじのかほつきは思ひありげに見ゆる

ぞやつ、まずかたりたまふべしといとねん比に

とはせたまふさては思ひうちにあるときは必

色にいづるとや今は何をかつ、み申候べし

まつたく恋慕のやみにまよふにあらずたまく

うけかたき身をうけながら斯浅ましき流の身

さなきだに女の身は五ツの障のあるゆへにうかむ事」16オ

かたしとかやあまつさへ斯御たづね下さる、御かた様の

御姿をよくく見奉れば勿躰なくも佛の

みでしとうとくこそは見へさせ玉ふ御身をも

けがしまいらせしくやしさよ何とぞして

かやうなる罪とがの消もやすらん事をのみ明暮心に

おもふのみそれゆへにこそ氣もおもく顔にあらはれ

さふらふそや此うへの御情に仏の縁ともなり

まいらせん御事を御おしへ下されかしとなみだを

流し語りければ其時お僧さてもそもしは」16ウ

さすがなり今は何をかつ、み申べし我はまことは一所不住の

法師なり色即是空煩惱菩提心やすくおほしめせ

かならず罪障消滅して佛果に至り給ふべしなかんづく

女人成仏うたがひなき經文をさづくへし一者不得作

梵天王二者帝釈三者魔王四者轉輪聖王五者

佛身云何女身速得成佛何疑のあるべきぞ

ひとたびの此の經を聞又はどくじゆめさるゝものならばたとひ

いか成罪深き流の身なりとも成仏せすといふ事なし唯

頼めたのもしや多年そなたの志まことありける」17オ

ゆへにより仮初ながらうかれきてそなたと枕をかわ

せしなりなをく行すゑまもるへしかならずうた

がひ玉ふなと夜もすがら御けうけに東雲もあけ

わたり灯火ともろともにかい消て見へ給はすあまりの

事のふしきさに爰やかしこと見てあれば枕のもとに

一首の和歌を残し給ふとりあげ見れば

うたがわで今こそ頼めいつはりの

不埒物語翻刻

なき世はのりのまこと成りけり

かやうの御歌を拝し有かたくも感涙肝にめいし扱は」17ウ

うたかひもなきお佛様の御おしへと思ひぶかくとうとみ

さづけ給ひし御經文あけくれ心におこたらずとなへ

て娑婆の縁つきはて此界におもむく鹿嶋立

のその口からはるくの一とりたびきのふ爰にき

たるまで姪しやゑんまの帳もはやく消すぐに

浄土へゆかふぞとおもふた所に思ひの外いま

大王の色にふけりて善をも悪をも打込に情も

しらずどうよくや永々娑婆にてあきはてたるつとめ

を又もや流の身思へはくうらめしやとなみだの」18オ

雨のおやみもせでついには両かななきつぶすふし

ぎやなたれしらぶるとは見へねども琴の音

しんくんと松風にひゞき空焼の香ほりたもとに

薫じたちまち両がんひらきあまりの事の姪し

さに四方のけしきを詠むればこくうに花ふり

音楽聞へ異香みちく紫雲の中よりしやば

にて逢しお客のぼう様こつぜんとあら

われ給ひ高尾か手を取大門口をそつとぬけ西の空へ

ぞゆき給ふ有かたかりける次第也 卷二終」18ウ

不埒物語卷之三

○三惡道繁榮の事

附リ

茶道姪鬼坊が事

○葬隕川原の后皇大王へ異見の事

慎の事

附リ 后皇詠哥の事

三国の例をひかせ給ふ事」1オ

(半丁空白) 1ウ

不埒物語卷之三

三惡道繁榮の事

爰に大王の御側近き茶道に姪鬼坊といへる

ものありかれに高尾を御預けなされ候所に

高尾の君行衛しれずになりければ大きに

おどろき大王の御前にかしこまり扱も夕し

高尾の君を何ものかさそひ出して候やらん

大門口をもきひしくせんさくいたし候へとも

さら／＼行方相しれ申さす候此うへいか成」2オ

うきめにあふせつけられ候ともぜひに及はぬ

御事となみだながらに奏しければ大王此

よし聞し召れはれやくたない事かな

何もの、しわざぞやむねん千萬高尾はあつ

はれ此里のたて物にして我等がたのしみ第一の

君と思ひしにゆだん大てきしてやられたは

ぜひもなし去ながら汝ずいふん心をくだきて

たづねよと唯一通りの御しかり姪鬼坊は思ひ

の外にわにの口をのかれ有がたし／＼とそう／＼」2ウ

退出したりけりされども日々いやましに死くる

遊女哥びくにおどり子わたつみ山ねこ野郎

みなこと／＼とゞめ置全盛の太夫格子さん

ちやつばねにいたるまで月見花見はゑんまの

諸役人物日通ひしゆら王の居つゞけかしこの

新ぞう爰の突出袖とめの蒸籠山をなし

春にもなれは家桜さて文月は門々の折

かけ灯籠いろ／＼に二どの月見の臺の物

す、き生けりむさし野々月をいだして」3オ

夜見せのすが、きてんつるてんと大門に市

をなしゑいとう／＼山のごとし六道の辻の

よたか三途川の舟まんぢう色と欲との

相の山には哥びくに無銭のやからをす、

めいたらしむる事さながら菩薩の蜘蛛

供養のごとく日々^{にちごとく}にわうへんして

無銭のともがらに五戒^{ごかい}をさづけその外

山ねこわたつみよびだしなんと、姿^{すがた}を現^{あらわ}じ

むりやうの方便^{ほうべん}の手くだをもつて上品^{じやうばん}」3ウ

上郎屋^{じやうろう}の二階^{にかい}に至^{いた}りがたきぶすいやはたちの

ためには四十八手の奥義^{おくぎ}をほどこしさて

又辻々端々^{つじくはじく}つまり／＼の辻八卦^{つじちく}手の筋^{すじ}

見るは銭^{ぜに}いらす見せ物^{けんぶつ}からくり中^{ちゆう}とびれん

まん一本竹^{いっぽんちく}に綱^{つな}わたり鞠^{まり}独楽^{こま}しなだま

おてゝこてんとおそろしき劔^{つるぎ}の山^{やま}にて生捕^{いけどり}し

山あらしといふ生た猪銭^{いさぶた}はもどりじや／＼と

うそのかわのたいこをたゝき哥^{うた}さいもんに

こさう三味線^{さんみせん}やつこはよだれをたらすやら」4オ

4ウ5オ挿絵

埒^{らち}こくたいもなかりけり又かたはらにしゆら

道の兵法^{ひやうぽう}つかひ餓鬼道^{がきだう}の煮^にうちや屋

一ふく一せん大和茶屋^{だいわちや}楊枝^{やうじ}はみがきはの

薬^{くすり}山賣^{やまうり}名方^{なほう}反魂^{はんこん}丹^{たん}疝氣^{せんき}の妙藥^{めうやく}一代

根^ねを切腕^{きりうで}をきる是か違^{ちが}ひのあるならば

八万地^{はちまんぢ}ごくへおつべしとそらせいもんに

不埒物語翻刻

ばかざる、は鬼神^{きじん}に横道^{わうだう}なしとかやその外

町々御評判^{まちくごひやうはん}松^{しょう}の緑^{みどり}の大白^{たいはく}ねり甘事^{あまいこと}のおやかた

なり又は新道^{しんみち}廣小路^{ひろこうじ}女郎^{やうらう}買指南^{かひしなん}の講釈^{かうしゃく}」5ウ

掛茶^{かちや}双六^{しやうりく}辻^{つじ}ほう引^ひお花^{はな}こんべい金^{かね}五三^{ごさん}まひ

けんねんじ夜講^{よかう}釈^{しゃく}には志道^{しだう}庵^{あん}けいせい

禁断^{きんだん}義^ぎには有^あかたき女道門^{にょだうもん}又はかけまの

いきちまであまねく十方^{じつぱう}に説^{とく}てきかすれば

牛頭^{ごづめづ}女頭^{にょづめづ}くわんぎのなみだに袖^{そで}をしほり

ゆやくのねんに角^{つの}を落^{おと}し前代^{ぜんだい}みもん

獄卒^{ごくそつ}の嫁入^{よめいり}智取^{ちと}吉原^{きちげん}通^とひの辻^{つじ}かごは

三挺^{さんてい}壺^{てい}歩^ぽでおせさつさと三つ羽^はのそやを

躬^こるごとし其^{その}外^{ほか}舟宿^{ふねど}たいこ持^も六道^{りくだう}の」6オ

繁榮^{はんえい}地^ぢこくの銭^{ぜに}もふけ讀賣^{よみり}評判^{ひやうばん}時流^{じりゆう}

うた天下^{てんか}泰平^{たいへい}此時^{このとき}ぞと貴賤^{きせん}上下^{じやうご}の

大^{だい}そ、りそ、りたちたる諸役^{しよやく}人^{にん}なにかわ

もつてとまるべし此間^{このまへ}も大罪^{たいざい}人^{にん}四五百^{しやうご}人も

とりにながす又大善根^{だいぜんこん}の種^{たね}を蒔^まし大善人^{だいぜんにん}を

地獄^{ぢごく}へやるやらおとすやら諸役^{しよやく}人^{にん}の最^{ひい}屑^{けつ}

沙汰^{さた}色^{しき}と欲^{よく}との引張^{ひはり}合^あ地^ぢこくのさたも金^{かね}

しだひとむかしの人のいはれしも今こそおもひ

知られける兎角遊ひはいらぬ物銭をためるが」6ウ
 かんじんと命にかへて持もあり武朱と彦歩
 の才覚に鑑がつまつて無理心中とでるも
 あり是ぞ誠に大ふらち極腹筋のつる

ほどこそおかしかりける事ぞかし

葬隕川原の后皇大王へいけんの事

傳へ聞孔子は鯉魚に別て思ひの火を胸に焼
 白居易は子を先立て枕に残る葉をうらむ
 是皆仁義禮智信の大祖文道の祖師

たり恩愛の悲しみ左の通りいはんや女性」7の10オ

爰に大王の御母葬隕川原の皇后炎王の御身

持つしか大ふ埒と成りて国のまつり事も取

うしなひ 剰 三代の臣下国家の政道をもい

たすへき両大臣を初め兄弟の者共まで

みなく押込心のまゝの振舞そのうへ筋目も

なき下臍までついせうけいはくのものを共をば

大録をあたへ匹夫下劣の鬼か娘のみめよきに

ほだされて中宮にそなへかれらが一族兄弟

にいたるまで高位高録となして国の」7の10ウ

まつり事をまかするゆへに普代相傳のものは

いきとをる事劍の山のごとくにして炎王を
 恨山林に隠いる斯おそろしき世の中に
 しぜん西方又は外国のゑびすなど一鬼お
 こりて王位をくつかへさんもはかりがたし
 若もさやうの時節に至りては筋なき

ものゝかなしさは文武弓箭の道といふ

事をしらざるゆへふせぎ戦ふちからもなく

金と命のおしさのまゝ早く敵陣に降て大王の」11オ

讎となるへきは鏡にかけて見ゆるなり何とぞして

諫言をもなさばやとおほし召ある夕暮のこと

なるに御母の后皇炎王の御殿へ御光りん

ましく四方山の御物がたりいつくよりも

御きげんうるはしく御ふところの中よりもひ

とつの巻物を御とりいだし是く大王御覽候へ

是は父うへの遊ばされし一字のまき物なき人

のかたみとなるは筆の跡またく此すへにその

いちじの心をうけて当世はやる哥を讀て我も」11ウ

段々老の波筆の命毛あしたにきれんもは

かりがたし老眼なからも筆を染たり是を

けふのみやげ物とおほし召はやく御拝覧

候へかしと御手づからわたさるゝ大王是を
おしいたゞきおしひらきて御覧あれは誠に
父大王の御正筆墨ぐろにへつたりと慎の
一字の文字さてその脇よりほそくと小野
おつうか筆の流母うへの御手跡なり讀て

見れは哥なり〇つゝしみはたゞまことなり」12才
礼義なり色欲酒のみつはかたきそ

大王是を御覧してにがくしき御風情

十郎姫を初めとして御側近き姪鬼坊

大王の御有様見るも中々きのどくさにみな

青醒て見へにけるその時に后皇は三国

の例をひかせかんげんの糸口よりおた巻のはてしも

なくいかに大王開給へ唐の玄宗皇帝は八十に

餘りて馬鹿を尽楊貴妃といふ女の色にまよひ

まつり事をとりうしない国家を奪れ又」12ウ

大日本におゐては義經といふ人文武二道はいふにお

よばす詩歌管弦道そのほか中飛れんまん軽

業人のおよばぬ事までも兼備はりし人なる

ゆへ日本一の名大将といわれし身殊更兄貴は頼朝

とて日本国の大あたまた天下にひとりの兄を持

不埒物語翻刻

供をもつれずたゞひとり堀川といふ所より嶋原といふ
悪所へ夜な／＼通ひ玉ひしゆへねいじん折を窺
て兄貴のいらるゝ鎌倉へ逆意むほんも有やうに

たび／＼のさんそうゆへそがさすがは凡夫なり若も」13才
13ウ14才挿絵

さうでもあるかやとそれよりも兄弟中次第々に

わるくなりわづかに五尺の身ひとつをおき所なく奥

州の高館といふ所で討死したとは申せども是は

まつたくうそなるべしあつちで死だ事ならは

こつちへこねばならぬはづさつする所が此人は天狗の

わかしゆであつたげな羽こそなけれ飛行して常盤

とやらゑぞとやら又はうその嶋とやらへのかれた物

と思ふぞや斯小国の大將すらせまじき物は色狂

いはんや御身三悪のあるじとしてかゝるふらちは」14ウ

何事ぞやはたして国をうしない介六の心中枕久などの

どらものとひとつ口にうたわれんはなんぼう口おしき

事ぞや是はおよばぬたとへなれども中天竺のまかだ

国浄梵王のひとりのむすこした太子といふ人は十九

さいの春の比五てんちくにかくれもなきやしゆたらといふ

て十六になる花のさかりのいもせをふりすてねごかしに

して王宮をしのびいで、だんどくせんといふ山へよぢのほり仙人の弟子となりみとりの髪をそりおとし羅綾のたもとを麻の衣に引かへて谷底の水を汲」15才蕨を折木の葉を抓難行苦行さんぎ百大劫をこへて大聖釈迦牟尼佛と正覺をさとり末世のいまにいたるまで衆生をさいどし給ふくどくは先祖にもむくふべし大將たる人は是かよき手本ぞやさりながらある人の嚆には釈迦といふ佛はまやといひし女の脇の下から生れたともい、又善導とい、し坊主は善道といふ瀧からでた或はかんせうくは梅の木のためから生れたなど、今の世までの嚆の種又は女の手から物をとれば五百生があいだ手のないものに」15ウ生る、など、とんだ事をおしゆるのも今の世あまりに色にふけり大切のおやのゆづりの家屋敷を失ひはては心中をしてかけかへもなき命をすつるばかりのともをしからんためにしやかといふとをりものが未来記を悟てい、出しけるぞや惣而何ほどけつかうな事又はうまいものおもしろい事なりとも身をうつほとにはまる事近比ふすい／＼されはこそ爰を以て中庸といふぞかし萬事かたよらすして唯その中を用ゆる事

こそかんじんなりかたよりにて深くはまりたりく」と16才めにも見へす千両屋敷のふたつも三つも棒につつかけ遣ひすて、おや兄弟より勘当をうけ一ぞく一家にうとみはてられた、すみもならぬてんちく浪人となり六道の辻にまよふものいにしへより数も限りもなし申さすとも御そんしあるべしかやうの凡夫物事にけんやくをいたし女郎を買とても妓宇やり手禿までにはなげをよまれ金銀つかふ事はをやぼてんと申そやおなし銭金つかふとも工面がたい一女郎のみけん眞實をはやく見つけ千両も出して」16ウ太夫をくひと根曳にしてあつちから札をいわれ末代までも名を残し我宿のみだい所とあふぎたて夫婦一連たくせうのさとりをひらく人々こそ色道の達人なり唯何事もよいかけんといふ事は。けつかうな。てうほうなものは。なけれども。是もあまりに。ふかいりするはいらぬ物。たゞ中庸をまもるがよし我が祖の達磨大師といふ人は此よいかげんといふ事をさたらんとて九ねんがあいだ座禪のいつゞけをうちたまふそのゆへに口おしやばかもの、名」17才をとりて今の世にいたるまで根付にまでは

せらるゝぞやと。さま／＼に。いけんの堤^{つゝみ}をつき
たまへど。大王のふらち水の出花。ことさら

外より悪事^{あくじ}をすゝめたてまつるもの

降雨^{ふるあめ}のごとしついにいけんのつゝみを

おしきつて三界^{さんかい}に名^なを流^{なが}し給ふ

事社^{ことせ}是悲^ひなけれ

不埒物語卷三 17ウ

不埒物語卷之四

○西方淨土の事

附り 三悪の不埒住進有事

○勢至不動口論の事

附り 釈尊武功有事

○釋尊三悪へ討手を蒙給ふ事

附り 三字旗名号の事

不動利釵の事」目次1オ

(半丁空白) 目次1ウ

不埒物語卷之四

西方九品安樂世界の事

釋尊より炎魔不埒ちうしんの事

爰に西方十萬億土安樂世界國の御あるじ

九品上生上品の都に方十万里の城廓宮殿

をかまへ高さ百由旬の臺をつくらせ数の宮殿

軒をならべ四方に堀あり、八功徳地、水とうくと

していさぎよし、中央に反橋を掛させ橋杭は

梅檀の卷柱に伽羅の高欄馬瑙の桁」2オ

真珠のぎはうしうしやうの橋板朝日にか、

やき橋の下には弘誓の船とて大船をうかめ

常樂我常の風吹て鴛鴦渚にねふりを

さます太宝蓮花は八万四千の花葉をつら

ね宮殿の有さまはどうばん宝蓋てんにひ

るかへし庭には金銀のいさごをちらし四季に

むりやうの花咲木の實をむすび靈香常

に薫し梢々に佛法僧の名鳥来りて

轉り慈悲心鳥の声たへずかりやうびんか鳥は」2ウ

鞀鼓をならし又は琵琶を弾じて唄うたふ

聞人心耳をすませり農民耕事

なしといへとも百味のをんじき蔵にみち

賤の女紡績の手わざなけれども寒からず

あつからずかゝる目出たき世界なれば極樂淨

土とも申スなり国王の御名をは帰命無量

壽阿弥陀佛法王と尊号し奉り御慈悲を

もつはらとして常に音楽舞曲を好

又は十種香立花などに月日をおくらせ給ひ」3オ

誠にめでたき法王にてこそましくけり

しかるに三悪のとり沙汰好事門を出す悪事

千里を走のならないなれば炎魔のふらち

日々のちうしんやむ事なし是によつて法王の

御前にはむりやうの化佛化菩薩を初めと
して左右のぼさつ、くわんをんせいしは、如意
拂子を取りなをし宝冠をかたむけ 謹而
奏しけるはさても近年炎広色にふけ
りて国のまつり事をとりうしない政道」3ウ
たゞしからざるによつて善惡の差別もなく
色よき女をは重惡たりといふともさんず
川原に廓といふ事をとりたて此所に
集置遊女と名付て寵愛となし
又娑婆世界におゐて多年法王の御名
をとなへ忠節をはげまし日果念佛の功
をつみ日々十念名号をさづかりしとも
がらまでことくくむけん地獄へおとし又は
真言ふしぎの今出のこうぼうともいわる、程」4オ
なる沙門には秘密の一句をさづかり現當二
世の心願満足をとげしやからをは落し
穴へ追込なぐくにうじやうをいたさせ又日蓮の
門弟をばひけを作りて奴子となし盜賊
重罪のものなりともへつらへるものをは
その罪の輕重によらずさつそく引あげ

不埒物語翻刻

大録高官となし国の政道をまかする是
によつて放埒むざんの世界となりて子は親に
てきたいおやは子どもを惡所へ賣下人は」4ウ
主を害し財宝を奪取しゆらのとうじやう
やむ事なく 刺 此ごろあしゆらをかたらい当城
九品の浄土をけがさんとの風聞 釈尊のかた
よりも家臣のれきく神通日蓮といへる
をもつて委細にちうしん有り又追々に阿難
迦葉富樓那等の軍士雲中の早馬
くつはみをならし 訴る事日々夜々にして
さなから櫛の齒を挽がごとしかれらは剛敵
御油斷ましくてはいかゝなるへしいかにしてか是を」5オ
しづめ御しんきんをやすめ奉らん御ちほうの
程御說法きかまほしやとふたりのぼさつは
涙をながして奏しければ 諸のぼさつ達
各 衣の袖をぞしほりける時に法王は
十由旬の玉塔に七宝莊嚴きらびやかなる
玉のすたれの内にして此よしちう聞し
召れじんくみめうの御声高らかに仰ける
やう我せいざい王佛のあとをたれ十かう正

覺のむかしより今に至て年久しく此浄土」5ウ
 をたへせざる所に炎魔が我俣にちくく重
 過し国王の身としていやしき鬼がむすめを
 ばいとり中宮となしかれが色にまよひその
 ほか法花経の功力によつてはやく浄土に
 いたるべき高尾といへる遊女をしはらく三途に
 とゞめおきておのがたのしみとなす又その
 外にふ埒なる事山のごとし釈迦のかた
 より訴なしといふとも我みけん眞實のびやく
 がうのひかりをもつて炎広が五臓見ぬいて」6オ
 能しれる事は鏡にむかふがごとしかれらを
 ほろぼさん事はかわらけをくたくよりもやすしと
 いへともきやつは色欲のとかのみにして博奕
 ゆすりのさたなし色欲ぼんのうはぼだいの
 たねなり時節いたらばかれといふともかならず
 善心にならざらんやと思ふ去なからあざぶ
 なれともいち日くどすいぶんのかしにいたし
 差置とはいへども今はしやかの目にだにもあま
 りてもくれんを初めとして舍利弗等の」6ウ
 忠臣を以てたびくの訴ことにおのくとても

慈悲心なきにあらず一殺多生の利にまかせ
 かれを退治する事も誠に慈悲のひとつ
 なり此うへは是悲におよばす去なから近年
 兵おとろへ將すくなしおのくいかにと演説
 ある唱聞圓覚群願すといへともさらに
 一言を演ものこそなかりける
 勢至不動口論の事
 其時に廿五菩薩の中よりも大勢至」7オ
 7ウ8オ挿絵
 す、み出て奏し給ひけるは誠に以てこれは
 やすからぬ御事なり慈悲も慈悲により
 玉ふべし此たびの討手の大将たれかれと申ス
 とも釈尊ならでは御座候まじ爛魔ついでと
 の御倫旨とくく遊はされしかるべうこそ候と
 謹てこそ奏しける時に不動ははるかの
 末座にひかへたりしがくわゑんをはなちあた
 りを拂てす、み出て申やう此たびの討手た
 やすきにあらず炎広がきこゆる剛敵にして」8ウ
 坂田の金平小林の朝比奈にもおとるまじ殊更
 つきしたがふものどもまで異類異形にして

中々もつて釈尊何の武功もなくしてかれに
むかわん事螳螂が斧なるべし此たび討手の
大將軍たるへき御倫旨は身ふせうに候へども
某に仰つけられ候へかしとあたりに人も
なきやうにかうげんはなつて奏しければ
其時勢至からくと打わらいなんぞ釈尊を武
功なしとさみするぞ釈尊の武功山のごとくに」9才
してかぞへかたし殊更筋目のたゞしき事を
かたつてきかせ申べし釈尊の先祖といつば
西天竺の空中寶塔品中十六出旬御あ
るじ多宝佛のかういんかひらしや国において
五百六億国の御ぬし淨梵大王の皇子なり
生まれながらにして天上天下天にも地にも唯
独りの男さる程に文武兩道にくからず
文殊といへる智者を愛して文学経論を
さとし普賢といへる軍者をなづけて」9ウ
武道劍術兵法の奥義究弓は楊由に習ひ
馬は佐々木平馬を師として用ひ綱五百六
十三をつたへたりさればこそ釈尊十六才の春
そのころはしつた太子といへし時年号は法界

不埒物語翻刻

三年三月下旬の事なりしに従弟の堤婆
達多といへしもの王位をかたむけんとて
我におとらぬ旁若無人裔といふものをかた
らい其外あまたのあぶれものをまねきあつめ
都合そのせい十万余騎を引卒して無分別の」10才
赤旗をてんになひかし先陣後陣の列を糺し
て先陣ははやかびらしや城までおしよせ後陣は
流砂川のすへなる砂漠といふ所に叩てかね
大鼓をならし鯨波をどつとあげたりしは
身の毛もよだつばかりなり時にしつたは拾
六才智仁勇の三徳自然と備り劍術飛行の
名人殊更弓勢およぶかたなし百矢發て
百矢中五人張に十五束三つぶせ矢柄はおよそ
箆竹のごとくなるに大身鎚のごとくなる矢の」10ウ
根をくつまきまで引返したる大のかぶら矢
をつかひきりくと引しほりしはしねらつて
切てはなせば此矢虚空にひゞきてなり
わたる事百千の雷唯今爰に落かゝるか
さしもの堤婆も矢風に霜て大地に
ひれふすいわんやその外の雑兵どもなむや

桑原くんと臍をかゝへてなきさけぶはきのどくなりける戦ひなり斯て此矢の鳴動鎮りしかば堤婆をはじめ人々ほつといきをつぎ」10の20オよふく心をとりなをして陣中を見てあればおそろしやな鐵の盾の厚は尺にもこへたるを七枚ならべてぐすと弱ぬきてうしろにあてたるひづら山といふ大山の中央をあなたへすつほりいぬきし弓勢たとへんかたもあらばこそさてこそ此矢のぬけし穴今の世に至りても碓井峠をとる人心をつけて見給ふへし是がよき證據なり打物とつてのはたらきはかううがいきほひにもこへたり長郎がちぼう」10の20ウにもすぐれすじめといひ武勇といひ、しからば此たびの討手におめてなにのふそくの候べしまづもつて貴殿には腹ばした、せたまふなよ第一がふ文字太才文学なければ武もあるましそのゆへいかんとなれば不動といふ文字はうこかずとはかゝざるや近く申さば文字に相違の討手の望やはりそのまゝ、爰にいられてうこかずさらず此王城をまもり給ふべし

是が貴殿に相應といちばんにいれこまれて」21オ不動はたちまち面色かわりむねんのほのを、後光にもやしきばを囁歯はならしたづさへ持たるばくの縄をふたへにとつて腰に巻ちから足をどうくどふみならすいきほいに臺座岩も崩る、はかりの大音あげて申やういかに勢至たしかにきけなんぞ釈迦の武功のみをほめて此大勢の其中にて我をは無筆よ文盲よと恥辱をあたふる腹たちさよ、曩謨三曼荼羅囉曰羅赦今こそ汝かいふ」21ウごとく不動の文字はみよとてうこかずさらずつゝ、たちあがりすでにかうよと見へにける法王此由觀覽あつて善哉々かたぐし申所みなもつて忠節のいたれる所なりたがひにいこんあるまじとてじんくみめうの御声をあげさせ制させ給へは双法鎮り本座にこそは着にけり

釈尊へ三惡の討手仰付らるゝ、事斯て法王御前にくわんをんせいしの二ぼさつ」22オ22ウ23オ挿絵

を初めとしておの／＼れつをたゞし宝冠を
かたむけてこそ並居たり時に法王仰けるやうは
ぞんする子細の有によりまづ／＼此度の討手
には釈尊たるへしそれ／＼門出をいわゝんと
御事にて蓮の糸にで織たりし巾廣の
白綾に弥陀佛といふ文字をべつたりと
真筆を染させられ釈尊にこそは下され
ける誠に奇妙筆勢しぜんにあらはれ
折ふし御手のふるへさせ給ふゆへ文字もふるふて」23ウ
見へけるはかの道風がふるい筆もかくやとこそは
感じける時に法王あふせありけるは此筆
勢のふるふ事は是ぞ筆法第一にして
剛敵退治旗名号のしるしなり抑震と
いふ文字は則地震のしんの字にして
易經に「日動而健剛中而應大亨
以正天之命也」といへり又平沢先生は
乾兌離震巽坎艮坤此八ツの文字
をもつて五臟六符を見ぬくともいへり此中の「24オ
震の一字は文殊の預る所にして雷動の卦
といへり又方角にとりては東とし万物

不埒物語翻刻

是より生ずる五行にとりては木なり四季
に配当する時は春となる春は陽なり雷は
陽氣のさかんにして地中の陰雲をさそ
いのほせて水火相たゝかふされはこそ雲中に
夥敷声あつて象は見へされともそのひゞき
百里を震おどろかす是によつて震木雷動
とは申なり地震もまた／＼此道理を以て」24ウ
地を震となり扱又弥陀佛三字は空假中
の三諦にして天人地の三才智仁勇の
三徳ともいへり抑佛の一字はイを弗と
書なり是は則欲界色界無色界の剛敵
たりといふとも容易拂ひのぞくの道理を
かたどるされは天台山におゐて妙樂大師の釈
文には三觀は阿弥陀の三字さこれはずぐに
妙法華妙法蓮花の花をちらして花々敷
真先にたつるぞかし釈尊はや／＼此箴を」25オ
なびかし百里を震おどろかし刀に血をぬらず
矢を上げずしていかなる剛敵なりともさつそく
にせめなびけんはあんのうちの事なるべしまた
此太刀と申事は往古東方の降三世と申ス」

鍛冶に申付百日の別行して四十八願力にて
加持し打たる本願力といふ四尺八寸ありけるに
大悲の弓に智恵の矢をとりそへてぞ下され
ける誠に奇代のしだひなり釈尊をおし

いたゞきは見給へや諸ぼさつたち初め笑ひし」25ウ
かたゞも是等程の御氣色はさぞうらやまし
かるらん弓箭のめんぼくありかたし／＼たとへ
かたきこたうめうくわん
敵五道の冥官をもつて鉞の山に楯籠とも我
また六道を現じて一戦にせめやぶりちんきん
をやすんじ奉らん今こそいさめ此駒よと

こんてい駒を引よせてゆらりと打乗給ひつ、
祇園精舎へかへられしはあつはれふしぎの大將
やと貴賤諸菩薩一同にほめぬものこそ

なかりけり扱それよりも不動は此たびの」26のオ
討手の願ひかなわずして打しほたれていたり

しが法王の御前に召れて仰わたされけるやうは
まづ／＼此たび不動には跡に残りて禁庭を

守護すべしとの勅定にて一振の利劔を

御てづから下されければ不動につこと打ゑみて有がたし
／＼誠に不思議の佛勅かなと三度頂戴仕くだんの利劔

をたづさへて昼夜是をはなたすして禁庭守
護とそ聞へける扱それよりも諸ぼさつはうやまい
退出なされしは有かたかりける次第也 卷四終」26ウ

不埒物語卷之五

○祇園精舎の事

附り あらかん參會の事

はんどくが事

○釋尊三惡へ出陣の事

○三惡の都軍評義の事

○阿脩羅味方評義の事」中ノ1オ

(半丁空白) 中ノ1ウ

不埒物語卷之五

祇園精舎へ阿羅漢大衆參會の事

抑 釈尊のおはします祇園精舎と申すは西天竺三

靈鷲山より辰巳にあたつて方三万里の都

なり此地に宮殿樓客を構へ三重の樓門あり

五重の玉塔には多宝佛おはします其外久遠

の諸佛は瓔珞細軟の衣を脱施幣の衣

を着し慈悲万行の徳をあらはし四諦の

御法を説せ給ふ又丑寅にあたつて高山有」2オ

鷲峯の双林山といへり山上に無熱池といふ

池有此山の中央に三重の鐘樓有此鐘は

往古釈尊法花經提婆品の御説法ありし時

不埒物語翻刻

八歳の龍女御説法を聴聞いたし此御經の功力

によつて下界のくるしみを離て南方無垢

世界に至る則此の法恩として龍宮界より

黄金を以て是を正真のむくに鑄たて、

釈尊へ獻するされはこそ山上の池に龍神

すんで常に此鐘を守護なせり扱また」2ウ

此かねをつく時は諸行無常是生滅法生滅

滅已寂滅為樂と響なり一たび此かねの

響を聞人煩惱の夢を覺す又鐘樓に

つゞきて一切經藏其外學寮數萬の

軒をならべ阿羅漢大衆説法論義に丹

せいをぬきんじ日々夜々に法問の聲に

心耳をすまず斯有がたき都なりしかるに

教主釈尊は西方より御帰城まし御前に

しやりほつ目蓮を召れ仰有けるは扱も此度」3オ

我三惡へ討手にむかふべきの仰をかうむる是に

よつてはやく大衆等を相集軍儀評定

いたさるべしとくくとの御掟なり目れん此由

うけたまはりかしこまつて候としゆるうの堂番

はんどくをまねき寄て申されけるは此たび

諸国へへんさんに出られたる大衆其外あら
 かの面々までめさるゝ事のあるによりて
 高樓に登てはやがねをつき五てんぢくへ
 告しらすべしはやくと申されければはん」3ウ
 とく此由承りとする物もとりあへすそうく御殿
 をまかりたち鐘樓をさして立帰り早鐘の事
 はたとわすれや、あつて又々御殿へまいり目連に
 むかいて申すやう先程何事か仰られし事の
 ありつるに承り候といそぎ帰り候道すからはたと
 わすれて候ゆへ近比むつかしくおほしめさるべけれども
 かさねては何事も御用の事御書付下さるべし
 とそ申ける目連おかしく思ひながらいさい心得候とて
 やがて筆をおつとりてたらじゆ葉に書付はんどくに」4オ
 こそはわたされけり惣じて此はんどくといふ人は
 釈尊の御弟子なれとも前世の戒行つたなき
 ゆへにや小機下根にして我名をたにもしらずその
 ほかの事は猶さらなれば我名を木札に書付て
 常にくびにかけしなり此人死て後塚のうへに
 ひとつの草生たり其かたちはじかみの葉に
 似て初秋の比その根に花ありにはひかうはしく

あちはひ五味をかねたり此草の名を知る人なし
 あるとき舍利弗是をとりて釈尊へ奉る教主是を」4ウ
 御覧あつてぜんざいく此草ははんとくか塚より
 生じたれはまさしく是はかれが精魂なるべし
 かれは下根にして記憶なしすでに我名をしらす
 札にしるしてくびにかけ常に我か名を荷なふたり
 しからは此草の名は茗荷たるべし下根なるが
 ゆへに花も下根にひらく俗此花をよんで茗荷の
 子といふなるへし去によつて茗荷をくらへば
 物わすれるなど、申事もはんどくが塚より
 生じたるによりての事なるべしまたく瘡を煩」5オ
 人おこりおちての、ちかならすめうがの子を喰す
 るといふ事もふるい日をわするゝといふ義理にや
 あるらんみなく庸醫どものあやまりなるべし
 とこそ御演説ましける斯てはんどくは
 鐘樓に登くだんの札をよみながら扱は早鐘
 をつけとの事かいなる事にや大衆たちを
 御あつめなさるゝといふ事はしらねとも鐘木
 の綱にとりつきてゑいや声を出してつきければ
 此かね五てんぢくへひきければ行脚に出られし」5ウ

大衆あらかん何事やらんと我もくとはせ集り
祇園精舎の講堂の大床に社並居たり

時に釈尊出御あつて仰出されけるやうは此たび

三悪へ討手の大将として發向いたすへきとの

仰をかうむるおのく宜敷軍儀いたさるべしとの

御掟なり面々此よし承りかしこまつて候と扱それ

よりも大衆達大目健連、摩迦訶施延、阿菟

駄劫資、橋梵、波提、各々評義まぢくなり

されどもいづれも智仁勇の三徳の佛法僧の」6才

6ウ7才挿絵

三宝を合せて六明通の人々なればつまはじき

せぬうちに先陣後陣のそなへまでことくく

相究まりすでに羅睺羅太子先陣と聞へたり

釋尊三悪へ出陣の事

已に評義相定り教主釈尊の御出陣今やくと

相待ける斯て其日に成りぬれば先陣羅睺羅

太子の御出立はだには蓮の糸にて五色に織たる

御はた衣召れ圓頓の御腹巻妙法蓮花の甲

を召し威徳神通力といふ太刀を帯せ給ひこん」7ウ

てい駒に金ふくりんの鞍をおきしやのくとねりを

不埒物語翻刻

相そへ目蓮舍利弗つばさの臣千貳百五十の比丘
を初めとして摩何波闍波提六千人そのほか

有学無学の大衆都合其勢六万九千九百

余騎各々三衣法服を着し正法みけん

眞實の若君を大將軍として三途をさしてぞ

押よせけり扱また兵糧の運送扶持方の下

行ならひに御馬の飼料にいたるまでしゆだつ

長者に仰つけられければかしこまり候と大船」8才

千余艘はや先だつて葬隕川三途の大湊

まで廻船する扱又釈尊の御出たちには應法

の妙服を召れうへには二十五帖の御けさに馬腦

さんごのくわらをつけさせ四天に黄金の鈴を

ならし百万金色の蓮臺にあなうらを

むすびやうらくけまんの御指物どうばん

ほうがいの御馬印十方衆生三字名号の

御旗を真先にさしあげさせ八万四千の大衆

を二手にわけ扱又後陣は釈提桓因二万のけん」8ウ

ぞく先陣後陣の軍法かたく兵士をだんくに

くりいだしきよりんくわくよくのそなへたゞしく

先陣ははや三途のこなたに着しかども

五一

後陣はいまだ祇園精舎にぢうまんして

おひた、し誠にてんかの耳目をおどろかす

ばかりなり

三悪の都軍評義の事

それ天に口なしといへどもかならず人をもつて

つぐる此事四方にかくれもなく三悪の都に」9才

傳へき、てうへをしたへとかへしけり炎魔此よし

聞し召大きにおどろきそれはまことか偽りかと

あきればてたるばかりなりや、あつてくどき事社

哀なりされとも後悔先にた、ず今更何程

くゆるとも是悲におよはぬしたひなり一方

のかたきをもふせくへき兄弟のものともは

中あしくそのうへ観目顰鼻はおしこめ俱生

臣はひつそくさせさて／＼いか成佛罰ぞや

誠に母の御いけん今ぞ身にしろややつらや」9ウ

とやせんかくやとあきれがほ見るも中／＼き

のとくなり爰に炎王の御舎弟の泰山王は

御中不和にてまし／＼けれども此よしを

つたへき、さすがにちなみのすてかたくとる物も

とりあへずむまやに入つて見給へは折節鹿毛な

る馬のゆあらいしてありけるに鞍置ひまの

おしければとつて引よせはだせにひらりと

打乗て一さんにとばせつ、炎王の御所にき

たり案内のいらばこそかしこに馬を乗捨て」10才

奥の一間はずつと通り大王の御前に畏る

時に大王泰山王を御覧じて御涙をはら／＼

とながし玉ひさて／＼汝はよき所へ来るぞや

他人喰寄親は泣寄常々われらがあ

しき事まつひらゆるし給はるべし此

たびの大難義たすけ玉へや泰山殿ひとへに

たのむ／＼とて膝をなでたりさすつたりしり

もちついてぞよろこびけるや、あつて泰山王

謹で大王にむかい申やう今更何程せんひを」10ウ

くゑさせ玉ふとも甲斐ござあるまじ此うへは

唯々一刻もはやく阿脩羅へ御使札をつか

わされ御たのみあるならばよもやいなみは申さる

まじとく／＼と有ければ大王此よし聞し召

あつはれ／＼よきしあんさすがにちなみほど

あつて我にちからをそゆるぞやそれにつき

てもさしあたり書簡を早速した、めん人の

ひとりもあらは社こそかね々くなんじ 汝なんじもしるごとく筆ふで

たつしやなる俱く生しやう手しんまへの口くちからたのまれず」11オ

我わは元もと来より惡あく筆ひつなりかれ是もつておやの

ばち母ははのいけんも聞きいれず今いま更さらかゝるうき

めにあふ父ちち大王たいわうの遊あそばされし慎つつしの一字じの文字もんじ

母ははの詠よみ歌かの心ここそ今いまぞ思おもひしられたり

さしもにたけき炎えん魔ま王わう皿さらのやうなるまなこ

より桃もものやうなる御み涙なみだをほろりくとお

とさるゝはさこそと思おもひしられたり大王たいわうは

よふく心こころをとりなをしとかく此こうへたれ

かれと申まをさずとも汝なんじちきく是こゝよりすぐ」11ウ

阿あ脩しゆ羅らがかたへ罷まかりこしよきにたのむくとて

手てをあわせてぞのたまひけり御ご舍しゃ弟てい此こ由よ

聞きこし召めさあらばそれがしまかりこしあ

しゆらをたのみ申まをべしもしいみなみ申まをなら

すくに迦か樓る羅らか緊きん那なら羅わ王わう又または摩ま睺ごら羅ら

迦か王わうなりとも是ぜ悲ひく味み方かたにたのむべし

御ご心しんやすくおほしめせとかうげんはらつて

たゝれしはあつはれたのもしくこそ聞きこへけれ

扱あそれよりも泰たい山さん王わうあしゆらがたへそ」12オ

不埒物語翻刻

12ウ13オ挿絵

いそがるゝほどなくあしゆらかやかたに着つしかば

案内あんないこふて内うちにいりあしゆらにたいめん

ましくみてみぎのしだひをかやうくとく

わしくかたう申まをされければあしゆらいちく

うけ玉たまり先まづもつて遠えん路ろと申まをし殊ことさら

世せ間けん物ぶつ騷そうなる折をりから此こゝ所ところまで御ご来らいりん

数かずならぬそれがしを烟えん王わうより御ごたのみ家いふのめん

ばく此こうへやあらんさりながら兄きやう弟だいのもの

どもをもまねきよせひとまつ評ひやう義ぎ仕しりて」12ウ

うむのへんとう仕しり候こうべしまつくしばらく

の内うちなりともそれにてゆるりと御ごやすみ

ひらにゆるりといひすてゝおくをさして

そいりにける

あしゆら味方評儀の事

扱あそれよりもあしゆら王わうかるらまごらか

きんなら王その其ほか外どう郎どう等めい召めあつめいかにかたく

聞きこ給たまへ此こたび炎えん魔まのふらち西さい方ほうへ聞きこへ

釈う尊う討う手ての太たい将しやう軍ぐんとして三さん惡あくまぢかく」13の20オ

おしよせそうづ川が原はらに陣ちん小屋こやをかまへ

その勢幾百萬といふ事をしらず

是によつてあんまくわきうにせまり舎弟の

泰山王といへるものをもつてわれにすくひ

の勢を乞此義いかゝあらんやおのゝいかにと申しける

時に家老をはじめ兄弟のめんゝいづれも

評義のまゆをひそむや、あつて家老の

跋婆多すゝみ出て申やう誠にもつて利の

当前去ながらすくひを出してまんゝいち」13の20ウ

敗軍などもいたしなば当家のめつぼうま

ねくに似たり又は勝利をゑ候ともゑんまの

武功にかぎるべし、なにさまよろしかる

ましと、みな一同に是を評すあしゆら、くわん

ゝと打うなづきもつともゝぐんぎ

一通の奥義爰にありとて感心するさり

なから我所存もひととをり申しひらく

べし又此うへもやあらんか、きかまほし、

それ我ひと、せ佛法について帝釈と」21オ

いさ、か治定をあらそいし事有しからは

釈尊、ゑんまをほろぼしそれよりすぐに、か

いちんすべきにあらず、さつする所すぐに我館へ

とりかくべし元來佛力といゝ殊さら

かちほこつたる大軍蜂のごとくにおこらば

此要害とてもあやうかるべししからば

此節炎魔に組するより外、愚意此

うへをしらずとこそは、のべられける兄弟の

人々を初めとしておのゝ至極と、うち」21ウ

うなづきさあらはゑんまへ此おもむきとくゝ

へんじいたさんとて泰山王にたいめん有り

扱々御待遠にこそありつらん去ながら

一存の御返事も成りかたくしはらく延引

いたし候炎王より御たのみの段いさいこゝろへ

早速に士卒を相催し追掛打立申ス

べし宜敷御披露下さるべしはやゝ

御帰宅候へと念比にこそ申けれ泰山此由

聞よりもあまりの事のうれしさに」22オ

海山かけて六万里をとぶがごとくにかへらるゝ斯

て阿脩羅は出陣とて馬物具もはれやかに

かるらきんならまごらとう其外優婆

塞、優婆夷まで都合その勢六万余鬼

くつばみをならしこくうをかけり中を

とび三悪^{さんあく}さしてぞいそぎける刹^{せつ}那^なかあいだに
あしゆら王^{さん}三悪^{さんあく}城^{じやう}に着^つにけり炎王^{えんわう}吒^あ悦^{えつ}の
まゆをひらき山海^{さんかい}の珍物^{ちんぶつ}にうどんそば
きりとりそろへておもくもてなし給ひけり」22ウ
しばらくあつて炎王^{えんわう}申^{まう}されけるやうは先^{まづ}もつて
此^こたび御^ごすくい下^{くだ}さるゝだん殊^{こと}更^{さら}はるゝの海山^{うみやま}を
へだてゝ大軍^{だいくん}を召^{めし}つれられ早速^{さつそく}の御来^{ごらい}駕^が近^{ちか}比^ひ
もつてかたじけなしさだめて泰山^{たいさん}が物^{もの}がたり
あらまし聞^きしめさるらん扱^{さて}々^々此^こたび不慮^{ふりよ}
の大敵^{たいてき}を引請^{ひきうけ}進退^{しんたい}身にせまり候^{こう}所に
貴公^{きこう}の御加勢^{ごかせい}を得^え候て我等^{われら}は申^{まう}に及^{およ}はず獄卒^{ごくそつ}
どもに至^{いた}までことゝく力^{ちから}を得^え候段^{だん}ひとへに
貴公^{きこう}の御^ごたすけと悦^{よろこ}いさみ給^{たま}ひけり 卷^{まき}の五終^{ごしゆう}」23オ

不埒物語卷之六

○阿脩羅軍陣物語の事

○三悪合戦の事

附り 舍利弗日蓮働の事

○神通曾司討死の事

附り 劔の山大合戦の事

同卷之七目錄

○羅睺羅太子弓勢の事

附り 視目瞼鼻さいこの事」1才

○劔の山落城の事

炎魔降参の事

附り 能化地藏の事

三悪道安堵の事

六道の辻制札の事

西方より鏡をおくらせ給ふ事

附り 視目瞼鼻の事」1ウ

不埒物語卷之六

阿脩羅軍儀物語の事

斯て大王は此たびあしゆらが大军を引卒して加勢に
来うへは鬼に鉄棒心やすしさあらはあしゆらに酒

ひとつ我も一ぱいのまんとてそれ／＼とありければ
時にあしゆら大王に打むかい扱此たびの軍儀士卒の
手配いかゞ御さだめ候ぞや承りたく候とあり
ければ大王此よし聞し召されはにて候手前に軍
学のもの言人もなく候ゆへいまだそのさたも」2才
いたし申さずいか、仕候てよろしかるべきや近
比御苦労ながら軍義一通りかたつて御き
かせ下されかしとぞ申されけるしからはかたり
申さんとてあしゆらは牀机引よせ腰打かけ
ざいおつとつて申やうまづ惣勢都合十六万
八千余鬼を三手にわけ観目瞼鼻両大
将として六万余鬼を相そへ死出の山に登
三途川を前にあて、川じりをさしふさぎ
通路をとりきるべし扱それかしは劔の山を」2ウ
うしろにあて前には葬隕の大川有つたへ
うけたまわる当国にては軍役として常々
女子に竹の根ほらせ御貯なさるゝよし
さぞ沢山にあるらん是くつきやうの事なり
此竹を以て竹たばとなし葬隕の川尻
より三途の川きしまですきまなくひ

しにゆわせ扱又劔の山の中央にやぐらを
あげさせ是よりつくわぬきずといふ大筒
をしかけおきて敵勢まぢかくおし寄来らは」3オ
長目半めのきらひなくことく打つふす
べき要害第一と此山をさだむべし

又大王には当城の御要害すいふんけんごに
御まもりあるべきなりその外兵糧の手

くばりこそかんじんにておはしまし候なり
たとへ釈尊飛行のつばさあればとて何
ほどの事かあらんや釈尊飛行せば我は

てつくわをふらしがんぜきをなげかけまん中
におつとりかこんで討取申さん事何より以て」3ウ

やすかるべし扱それよりもすぐに西方へ押
よせてんかのあんひをきわむべきなりとて
四方八めんの下知をなしけるありさまは

誠にゆゝしく見へにけり斯て時刻も

うつるへしはやく打たてものともと大
音あげてぞよばはりける八万余鬼を

三手にわけあか旗三なかれてんになびかし
つりがねの馬印を押たてさせつじ風の

おこりたるごとくにて劔の山に籠しは」4オ
あつはれ大將やと獄卒こそつてほめにけり

三悪の都合戦の事

干時炎王三年二月十五日釈尊葬隕川原
に着岸ましめて濱の手に要害の城を

御普請あつて四百里四方に沢地を陣どり

三方に堀をほらせてそうづ川の水をせき

いれければしら波とうくとしてあたかもこん
りんより涌出るがごとし壺間そとはを以て

三悪のみちをかこみ柵を三重につけて」4ウ

馬ふせぎの十手を高くつかせ陣小屋の軒を
ならべ垂木くわうごんの風鈴を釣して

士卒のねぶりをさます又夜討の用心き

びしくけんごにまもり夜に入ぬれば鉦太鼓笙
娑栗の調をそろへ怨をたゞし相廻り

つまりくゝに篝火おひた、しくたきたて

その火さながら天のこがすがことしあくれば
辰の上刻より羅睺羅太子は六万余騎を前

後にたて、三字名号の御はたをおしたて」5オ

先陣ははや三途の川をおしわたらんとて

五百の大衆あらかんを初めとして我もくく
衣ころもの裾すそを高く引あげゑいやくくとす、み
ける敵陣てきじんよりも観目かんめ観鼻くわなはな両大将この

よしを見るよりもあれわたすなものともしよ
あますならすな討うとれとて魔まおつとりて
下知げをなせば承り候とて雑兵ぞうへいあまたやり

ぶすまをつくつておいかへさんおしわたらんと

おめきさけんで戦たたかふありさま大海だいかいうしほも」5ウ

わきかへり血ちは涿鹿たくろくの川となつて紅派かうは盾たそを

流ながし白刃骨はくじんほねをくだき爰こゝをさいごと戦たたかひ

けり双方義ぎをおもんじ死をかくる決断けつだん

勝負しょうふまちくなり目蓮もくれん舍利しやり弗はつ此有

さまを見るよりも衣ころもをぬぎすて大手を

ひろげて飛行ひきやうのはたらき物によくく

たとふればむかし娑婆世界しやわにおゐて治承じせう

の夏なつの比宮軍ひみやぐんのありし時宇治川うじがはの合戦かつせんに

筒井ついでの淨明じやうめい一來法師いちらいほふしふたりの坊主ぼうずの」6オ

6ウ7オ挿絵

かるわざも中々是にはおよぶまし敵てきみかたの
ねふりをこそはさましけりむらがるものおは

とつて引よせねちくびつ、ぬき人つおてむ
かふてきをばわりたてくさながら手眞猪てまじしの
あれたるがごとくにて八方に切ちらせばあ

たりに近く敵てきもなししばしの内にくつきやうの
首み百八討ひやくはちとりじゆすつなぎといふ物にたんぐに
つなぎ給ひてしばしはいきをそつかれける斯かく

命まことを的にかけていそかわしきその中にも折」11ウ

ふし三途の川原にあざみといへる草花さかきの盛さか

なるもなかばは手眞てまのあけにそみて皆みなくれ

なるに見へけるをしばらく詠め給ふ所に、なに

もの、しわざにやありけんひとものあさみの

くきにたんざくをつけてあり目蓮もくれんあやしく

おぼし召とりあげ見れば○百八のなみだやかゝる

鬼あざみ扱つかは傳つたへ聞きし此比このころ三惡さんあくに時行はやる

發句とやらなるべしさてくやさしき事

かなまことに鬼おにの目になみだとはかやうの事をや」12オ

いふなるべしとしてしばしはかんじ給ひけり

さてそれよりもくだんの首あまたの大衆鬼

ましりにかけ念仏ねんぶつのゑいや声こゑせめ念仏ねんぶつにて

引張ひっはり合あたがひに首をあらそいけるさてこそ

まつせにいたるまでしゆず玉のその数を百八とは
申なりせめ念佛と申事も此時よりこそ
はしまるなり

神通曹司討死の事

されとも敵もさすがなればあら手をいれ」12ウ
かへ石火矢鉄炮すきまもなくうちたて矢
たばをたとうでた、かひければさしものもく
れんしやりほつも大軍にうちたてられ
みの毛のごとくに矢を肩てたちの刃も
さ、らのことくになりにつり味方にも手
のもののども八十三騎枕をそろへて討死を
こそしたりけり今は目蓮ふかいりしては
あしかりなるとてむらかる敵をおつはらい
本陣さしてたちかへり太子の御旗元を見て」13オ
あれはばつくんうすくぞ見へにける敵せい
此よし見るよりも達兵きうにもみ
たてさしはさんで討とれとてゑいや声を
出し鯨波をつくりおめき叫喚きつて
かゝるいよくあやうく見へにけりかゝりける
ところにしゆだつがちやくし神通曹司は

不埒物語翻刻

すこしへだて、戦ひしが此よしを見るより
もさあらは太子の御旗本へ御かせい申さん
とて死をせんとくにまもるも此時なりとて」13ウ
手ぜい引ぐしたすけ来りくもでかくなわ十
もんじこくうむりやうにきつてまわりかく
はながはたもとへかけいりてついに討死をぞ
したりけり生年つもつて十八才五てん
ぢくにかくれもなき美男にてはしのく玉の
きさきさへ恋わび給ふ程のきりやうなれば
その外の文玉つさかつもかぎりもな
かりけり殊さら文武二道はいふにおよ
ばず色もなさけもふかくしてむくわん」14オ
のたゆふあつもりくすの本まさつらと申とも
是にはいかてまさるべし日比心ばへもたかかり
しがはたして忠死をとげたりとて
雑兵獄卒おしなへてよろいの袖をぞ
しほりけり

阿難迦葉神通が行衛尋る事

斯てその日のた、かひもたつの上刻より
酉の下刻にいたるまでいきをもつかずた、

かひしかば相引にこそはひいたりけりすでに」14ウ
その日も暮ければたかひの陣やに、篝火をたきて

用心きひしく見へにけり羅睺羅太子の御本陣

阿難迦葉は言葉をそろへて申スやう君の

御はたもとばつくんうすく相見へこん日の

御た、かひすでにあやうく相見へ候所に

神通曹司か横矢に躬くずしその身

も鰐鼻かはた本へかけいり敵とくんで

ついに討死をつかまつり候是によつて

敵ぜいも次行になつて双方相引に」15オ

引しりぞきさてこそ君の御そなへもつ、が

なくわたらせたまひ候誠に義をおもんじ

忠死をつかまつたる若もの適次信にも

おとるましき神通曹司かなと鬼をもあざ

むくあなかせう衣のそでをぞしほらる、

さてそれよりもふたりのそんじやは御本陣を

たちいで、曹司がゆくへたづねんとて沢地に

くたりて三途の川ばたこ、やかしこと

たつぬれとも鬼の死がいの山をつみ」15ウ

かさねくらはし道見へずせんかたも

なくふたりのそんじや今は本陣にかへらんと

せし所に四手の山のいたゞきより月ほの

ほのと見へければうれしや是をちから

として神通曹司はおはせぬかぞうしは是

ではなきかやとあなたこなたと見し所に

敵方の獄卒三人たちいで、あなんにむかい

申やう御たつねなざる、は若衆様の御事

かやもしもその御かたさまの事にましまさば」16オ

16ウ17オ挿絵

御おしへ申べしいまだいきもかよはせ候なり我々

どもあしゆらがたのものにて候へどもあまりの

事のおいとしさに此川ばたよりあれなる

大木のもとへ戸板にのせまいせ唯今送り

まいらせ候なり御道しるべいたし申さんいざ、せ給へ

とて三鬼はそんじやの先にたちてぞとも

ないけるかしこになればふたりのそんじやさては

是こそぞうしなり、あまりの事のうれし

さになくより外の事そなし斯て二人の」17ウ

そんじやたちはあとやまくらにたちよりてさま

ざまいたわりたまひつ、いかにぞうし心は

なにとさふらふとたづね給へはいたわしややう／＼と
まくらをあげさもくるしげなるいきのした

よりも太子様には御つ、がなくわたらせ

給ふか御きけんのほどこいぶかしさよきかま

ほしきにいま、でいきもかよふなりといふ

声もたへ／＼なり両僧此よし聞よりも

あつはれさすかにぞうしかな太子様につ、がも」18才

なし外にい、おく事あらはいのちのうち

なになりともわれ／＼どもにかたり給ふべしと

なみたながらにとひければ有がたし／＼

なにのねがひもさふらはす去ながらなきからを

けふりとなして下さるべし是のみたのみ

たてまつるといふ声の下よりも早たへ

だへにぞなりにけり両僧なみだをながし

給へは獄卒三人もろともに声をはかりに

なきにけりやう／＼なみだをおさへつ、はや」18ウ

しの、めもちかかるべしとく／＼けふりと

なさんとして篝のたきさしとりあつめ一へん

の煙りとなし骨をうつわにひろいつ、

西天竺へぞおくらる、あわれといふもあまり

不埒物語翻刻

ありほどなくしの、め明わたり敗軍の

若ものども五騎三騎つ、太子の御はた本へ

はせあつまるもの、やう／＼と千騎にはたら

さりしに舍利弗目蓮魔おつとり大音

あげて申やういかにめん／＼今日の合戦に」19才

歩行武者一騎討とめたるものには御ほうび

として三十俵式人扶持騎馬武者一騎うち

落したるにおゐては百石の褒美たる

べしとふれければ若者どもはいさみを

なししからは此うへ手がらしだいすいふんはた

らき申さんとしてしづまりかへつてひかへしは

たのもしくこそは見へにけり

劔の山合戦の事

斯て太子はきのふの御た、かひあやうく見へ」19ウ

させ給ふ所に神通曹司横矢に躬崩し

つきくづし相た、かつて討死をとげたりし

ゆへにより御つ、がなく御本陣へいらせ給ふぞ

目出たけれ扱それよりも御手ぜいにたん／＼に

相くわ、り三千余騎とぞ聞へけるあしゆらが

出張の劔の山におしよせ鯨波の声をぞあげ

にけり数万のかたき此よしを見るよりも太子
の勢はわつかにして三千騎にはよもすぎじ
先陣後陣ひとつになつて中にとりこめ」20才
討とれとて十万余鬼が一手になつておそひ
きたる所に太子のそなへの堅固なるを
見ておいとゞまりてぞひかへけるかゝりける所に
あなんのふせ勢式千余騎一どにどつとあらはれ
出狸々緋のてつほう五百挺ひざたいにてうた
せければあだはひとつもなかりけり白しないの
弓五百張爰をせんどゝ躬けるまゝ盾竹
たばもたまらばこそ死人の山をそつきに
ける

不埒物語卷之七

羅睺羅太子弓勢の事

されども敵勢数万鬼の事なれば死人のうへを乗越
あら手をかへて戦へばひるむけしきは見えざりける
かゝりける所にめての山脇より十方衆生の御旗
日月のごとくおしあげければさては此旗はまさしく
釈尊の御馬を出されけるはとかたきの勢は
見るよりもおそれおのゝき雑兵獄卒たまり
かね風に木の葉のちるごとくむら／＼はつとぞ」一オ
落うせける見るめかくはな両大將士卒を
はげましせいすれどもおくびやう風にさそはれて
崩れたつたる雑兵獄卒何かわもつととまる
べし一鬼も残らず逃うせたりされどもその
中にも義をおもんじたる手のものどもやう／＼と
百鬼にはたらざりける太子此よし御覽じて
ぜつたいぜつめい爰なりとてやぐらにひらりと
あかり給ひ大悲の弓に智恵の矢をはげきり
きりと引しほりしばしためらいあいやつと」一ウ
きつてはなせばむさんやなかぐはながむないた
をくすと躬とをし後にひかへし見るめの大臣

かぶとのみけんにはつしとたち血しほになりて
矢じり四五寸しころがねのところを射いだし
給へは何かわもつてたまるへき馬より下にどうど
落る目蓮すかさずつとより観目驪鼻
ふたりの首水もたまらず打おとしあしゆらが
陣にぞおくられけり扱又太子の弓勢は百合若
大臣八郎為朝と申とも是にはいかでかまさ」二オ
二ウ三オ挿絵
るべしとて残りしやつはらおそれをなし
劔の山へぞ逃かへるあしゆら大きに肝をつぶし
さては釈尊此所までよせきたる事程も
あるましおの／＼用意いたされよとかるら
まごらかきんなら王あわてふためきうへをし
たへとかへしけり
劔の山落城の事
斯て釈尊は三途川原の合戦に勝利を得た
まひ見るめかくはな両大將を討取それよりも」三ウ
だん／＼にせめいり給ひ劔の山をとをまきにし
て御覽あるに四方谷ふかふして岩そひへ
がんりんにはねをうづみばんこもくぜんの

けうかいけんかべうくとして岩ほが、たり
 前には血の池の浪とうくとしてなまぐさき
 事鼻をおほふ峯にはれいせうぎ、として
 死かばねをさらし萬木黒雲をつらぬき
 日月のひかり目に見ゆる事さらになし
 又南にあたつてその高さ数千丈もあなた」4才
 より霞に落る瀧のありみな紅井の血しほ
 なり山の中央に三重のやくらあり是こそ
 あしゆらか本陣なるべし誠にく鬼すむ山
 とておそろしさ身の毛もよたつばかりなり
 ふもとに陣小屋軒をならべ石垣高塀ことく
 しくあるいは石火矢ほうろく火矢そのほか
 てつ火ぬぎずまで矢さまくにしかけおきて
 すわともいはうちくづさんずるけしきなり
 しやくそん此よし御らんじて味方の軍勢に」4ウ
 仰ありけるはたとへかたき幾百万鬼あると
 ても味方の軍兵一手になつて四方八めん
 たゞ一さんに惣せめにいたさるへしとの御下知
 なり大衆軍兵此よしを承りもつともさ
 やうしかるべしとてそれよりもおのくは

せめいるへき刻限をいまやくと相まちけりか
 くてあしゆらはくんりよをめぐらしかるらにむ
 かいて申やういかにかるら聞給へ大軍にむかつて
 勝利をえん事は夜討にしくはなし此義」5才
 いかゞあらんやと申ければかるらを初めきんなら
 まごらにいたるまでもつともくしかるへしさ
 あらは用意仕れと小姓馬廻りにいたるまで
 そのきりやうをゑらみてすぐやかなるものども
 ばかり八千余鬼をすぐりたて釈尊のおはし
 ます御出張のとをまきまでその夜のうし
 みつ比一方よりせめいり三方より五どのの
 めうくわんをもつて陣小屋に火をかけさせ
 ければ折ふしびらん風といふ風たゞ一通に」5ウ
 はげしく吹て人馬の肉を吹きる事あた
 かもまぐろのたちうりのごとくにして
 いさこをまくりあげてふきたてくするほ
 どになにかわもつてたまべき陣小屋た
 かへい柵もがり荳壳をたくにさも
 似たりその火てんにほどはしりてひさう
 ひゞそうてんをこがす地は又こんりんなら

くのそこまでやけぬけしはおそろしなんど、
いわんにもけふりにむせびて声もいず」6才

大地にひれふすばかりなりされとも釈尊の
御はた本には十六羅漢の初めとして五百の
大衆大あらかん六明通の人々なれはかねて
かくこの御事ゆへすこしもおとろき給はず
して白しないの弓五百張てつほう千挺
くつきやうの躬手打手をそろへ先手を張
こまのかしらをかんとうにたて鎧ぶすまを
つくりて御本陣を十重廿重にかためて

相さ、ゆしやくそんもとよりふてき第一の」6ウ

御大将にてましませばすこしもさわぎ給はず
もくれんはなきかあれ消との御下知なり

目蓮此よし承りかしこまつて候とたちまち
しゆみせんへとひのぼりそうめい海の潮を
けしの売にて汲かけくしたまはほの

をさかんにもへあがりし火はことくくきへ
けれともちやう夜のやみの黒けふりに

こんざつしていづれか敵いづれを味方といふ
わかちもなくおめきさけぶその声は山も」7才

くづる、ばかりなり時に釈尊此ありさまを
御覧じて八万四千の大光明をはなし

給へはふしきやな大千世界の草も木も

みな金色の浄土となる敵勢猶もひる

まずして矢さきをそろへてさしつめ引つめ

躬かけ奉る矢さきは則ことくく八ようの

れんげとなる打かくるてつほうはかへつて」が

身にあたるさしもにはやりしあしゆらが

大軍此いきほひにおそれをなし打ものを」7ウ

すてかぶとをぬぎてかうさんし佛の弟子と

なるもありあしゆら此よし見るよりも大

にいかつてそばにありける八尺あまりの大石

をかるく引さげ日より高くさしあげ

釈尊をめがけつ、みちんになさんとくたん

の大石ゑいやうんとなげつけ、れはそのいし

佛のひたりの御あしへあたりて小ゆび先より

血をすこしいたしけりさてこそぶつばち

たち所にあたつてたちまち大地さけて」8才

いきながらないりのそこにしづみけりしやくそん

是を御覧じて扱もふびんの事かなもつとも

おのがつくれる罪とはい、ながらせては
 雑兵の手になりともわたりあい運のてんに
 まかせ討死をいたすとも又はしやうがい致とも是
 こそ大将たるもの、ならないなるになんぞやさには
 あらずしてあぢな穴へ落いる事のおびん

さよ我はまつたく罰あたれとおもはぬぞや
 帝釈天のゆるさぬぞやせて此節さい」8ウ

ほうのくわんせをんをたのみなばよもやあなへは
 はいるましくわんをんのせいぐわんには我をねんする
 ともからはたとへ大きな火のあなへおし落されて
 はいるともたちまちに火坑變成池 とのち

かひぞかしさりながら是もまた水心をしら
 ざればその池水におほれつ、ついには死ぬで
 あらふぞや扱もふびんのあしゆらやともつたい

なくも御涙をなかさせ給ふぞありかたき誠に
 提婆が悪もくわんをんの慈悲とてあしゆらは」9オ
 あちな穴へおちけるなりされはこそ此あな

今に三途にあるとなり誠に／＼おそる
 べきは色欲酒の三つにありかるがゆへに
 其本亂而末治者否矣といへりひとつは

衆飲の臣おほくして上を掠善を非と
 なし悪を是としての疾なり唯故人の
 おしゆる所なくのみ今社おもひしら
 れたり

炎魔降参の事」9ウ

三悪の都には前後のた、かひに勝利をうしない
 大王をはじめ兄弟の人々げつけいうんかく
 あんにそういしつえはしらとおもひし

阿脩羅は穴へ深入してかへる事やら
 かへらぬやらもはやたのみにならぬそや
 観目瞋鼻二人のものは討死しとかく

何とぞわぼくをこひ命ばかりもたすかりて
 当家そうぞくいたす事はそかんじんか

なめなり命あつての物たねなりかた／＼」10オ
 いかにと申さる、おの／＼此義もつもとしかるべし
 さいわひ此比俱生臣は佛法を聞信して

みろくといふ古主のよしみをもつて羅睺羅
 太子の御前にいたりて再三なげきしかば
 羅ごらいち／＼しだひを聞き召御なつとくの
 うへそのこうをたて、御しやめんあつて此ころ

釈尊しやくそんのはつかにくだりまかりあるかれをもつて

御みなげきあるならは慈悲じひたい第一の大將なれば

かならず御みゆうめんあるへきなりとくく」と10ウ

す、むれは大王おうぢ打うちうなづきもつとも道理だうり

しごくせり去さながら我等われらがふかく不ふ

埒らちゆへ官録くわんろくともにとけあげしふそく

恨うらみのあるゆへにはや先たつて降くだりしぞや

是も手前のあしきゆへ人を恨とおもふ

ましされはこそ古哥ふるかうたにも我かよきに

人のあしきのあらはこそ人のあしきは

我があしきなり人をたのむにおよぶまし

そこがさすがにおとこなりまづくあかぬ」11オ

中なれども十郎姫じゅうらぎめにも三くだり半のおき

みやげ是よりすぐに釈尊しやくそんの御前へまいり

申べしはやく用意有へしとて日比相ひこうあいともなふ伴

臣下五人はたちばかりの小姓こせう召つれて

釈尊しやくそんのおはします御本陣ほんじんへぞいそがる、

御本陣にもなりしかば御しらすに平へい

伏し御とりつぎをもつていちくしだひを

言上ごんじやうなすとまる所は何とそひとへに御

不埒物語翻刻

慈悲をもつて此たびのふ埒御らちゆうめんを」11ウ

かうむり命はかりも御たすけ下され候やうに

よろしく御とりなしをねがひたてまつると

なみだをながし申けるはよその見るめも

あはれなり時に天眼てんげん第一の阿那律尊あなりつそんじや者

此よしをうけたまはり今ぞまことに本心に

たちもどり申さるゝだんいさいこゝろへ申なり

心やすくおもはるべししはらくそれに

御ひかへといゝすてゝすぐに御前へまかり出いで

炎魔えんまのねかひかやうく」と奏しければ」12オ

12ウ13オ挿絵

釈尊しやくそんよしを聞き召れもつともさこそ

ありたけれと早速に御たいめんましく

誠まことに汝自国なんじこくにあつて自由じゆゆの至りその

罪つみはなはだかるからず此次このたび而をもつて根ね

葉はをもたつへきの所なれともけうくわん

王りうより年久としひさしき三惡さんあくの惣追罰そうついばつの大王

なればまづく此たびのふらち赦免しやめんいたす

べし此うへすいぶん善心ぜんしんに立もととりて色欲いろよく

酒さけのみつをつゝしみ兄弟きやうだいの中むつましく」12ウ

国民のせいいたうによしまなく又はひいきまい
 なひのさたなきやうに相まもるべしとて
 唯いつたんの御しかりにてぞんじよらざる
 御こんせつなる御ことばに炎魔をはしめ
 兄弟の九王家臣の面々にいたるまで
 おの／＼かうべを地につけ誠にもつて
 有がたき佛勅かなとくわんきのなみだに
 いづれもたもとをしほりける其時釈尊仰
 有ける汝が家臣忠信第一の俱生の両臣」14才
 汝が不埒にまかせて官録を召はなすといへ
 どもかれは汝を恨ずして己を恨はやさき
 だつて羅睺羅が手に候ぞや此うへは俱生
 両臣のものを官録を相まし召つかふべしとの
 仰なり炎魔佛勅を承り誠に以てあり
 かたき御事かなたゞいま、ては色欲酒にふけり
 俱生臣の官録をもとりあげ国家の政道を
 とりうしない候段ひとへに天道へたいし又は
 父母へ不忠不孝その罪のがる、事をしらす」14ウ
 たちまちに御罰とかうむり此身のほろぶべき
 所に釈尊の御慈悲くわんじんたいにして

御ゆうめんのだん五臟六府にしみ／＼とあり
 がたき事言説のおよぶ所にあらず俱生臣
 にも官録をまし召仕申候べしそのうへさい
 の川原の地蔵と諸とも我も則能化地蔵と
 あらわれ六道の辻に立てまよひの衆生を
 みちびき善所にいたらしめ申べし御經文
 の心のごとく不借身命をなげうち忠節を」15才
 ぬきんじ申へしとそ奏しけるしやくそん
 いち／＼聞し召善哉／＼汝しらずや
 九遠實成より汝は地蔵の化現なるぞや
 今又能化の二字は汝が發明末法相應
 当世の梵夫下根下性にして其智うすく
 末法にいたりてはさらなり我れ滅しての後釈
 門たるもの、口より出る所の十念名号といふ
 事いづれかへだてあらんや唯々末法の凡夫
 色衣絹衣をたつとんで木布黑衣を嫌事」15ウ
 のあるなるべし是を則まよひのぼんぶとは申なり
 しからは汝末法末世にいたるまで老若なんによ
 童男童女のこ、ろ／＼にしたかつて能化
 その氣に應しまよひのともからをよく

みちびき申さるべしとのたまひそのまゝ、御座をたゝせ給ひて寶塔の中にいらせ給へは、
焔魔をはしめ人々是有かたし／＼と三度
拝したまひけり扱こそ炎魔は地蔵の
化身とは申なりまよへは多んまさとれば地蔵」16才
いつれか兩説何うたがふにたらず扱それより
も炎魔王本領をあんとしておの／＼枕
を大山のやすきにおかんとよろこひのまゆ
をひらきしやくそののいらせ給ふ宝塔の
御かたをふしおがみ／＼三悪さして帰らるゝ
誠に日出たきしたひなり

釈尊三惡へ制札之事

釈尊の御前へ舍利弗目連兩僧を召れ
いかにかた／＼此たび炎魔が降參九王の」16ウ
面々俱生臣にいたるまで三惡の政道御おき
てのとをり急度相守そのうへゑんまは
分身の能化地蔵と現しさいのかわらの
地蔵と申合せて六道の辻にたちまよひ
の凡夫をみちびき申べきのよしこれに
よつて本領をあんといたさせ候よし西方へ

不埒物語翻刻

そうもんせんとか／＼用意有へし
との御てうなり時に羅睺羅太子此由を
聞し召しからばそれがし是よりすくに西方へ」17才
まいらんとてこんでい駒に打のらせ西方さしてそ
いそがるゝしやくそんなも西天竺へかへらせ給ふそゆゝ
しけれ祇園精舎にいらせ給ひ目連を召れ
仰わたされけるやうはぞんずるしさいのあるに
より制札を相したゝめけるはやく／＼三惡へおくる
べしとの御掟なり目連よしをうけ玉り
畏て候と制札をこそしたゝめけるその
文に曰

制札之事」17ウ

一 忠孝をばげまし夫ふ兄弟諸親類にむつ
ましく召仕の獄卒に至まで憐をくはふべき事
一 萬事おごりをいたすべからず衣類食事に至迄
けんやく第一にいたし虎の革の褌は目見以上の
獄卒たるへし其以下は虎斑のもみ紙を用べき事
一 盜賊並惡堂ゆすりのやから有之におゐては
早速訴出へしご褒美として虎革三枚下さるべき事
一 半睡「三途に」建立いたし候遊女町の外に抱遊女いたしおき

或は呼出し緋摘山猪のたぐひし外より「外より」慶大本抹消」

18才

相しれ候は、いち／＼召捕へ弓削道鏡か手に
かけさせさいなますへき事

一鬼の賣買かたく令停止之並年季に

召抱候小鬼女鬼たりとも十年に限るべき事

一俗家におゐて宗論かたく令停止十宗八宗に

わかつといへとも方便といふ事をしらずおのれが

家職をわすれて宗論をいたし又は菩提所を

捨置他へ無益の建立を企申間敷事

一阿修羅がごとき魔法あほうをつくすもの」18ウ

これあるにおいては早速訴出べし御ほうびと

して無疵の豹の革拾枚下さるべき事

右之條々急度可相守之相そむく獄卒

これあるにおゐていち／＼角をもぎとり

鬼菌をぬき新發知入道いたさすへき者也

仍 如件

閻王三年月日 目蓮判

となされつ、三惡へおくられる扱こそ末世に

いたりても六道の辻に此制札のあると也

19ウ20才挿絵

西方より三惡へ鏡をおくらせ給ふ事

其後西方十万億土国よりも大勢至をもつて

一面の鏡をおくらせ給ひけり炎王是をおし

いた、きか、みにむかつて見てあれはふしぎや

観目瞼鼻二人の首くだんの鏡にあらはれ

両眼を見ひらき大王にむかつて申やうあり

がたし／＼からだは戦場の土となりても魂は

首にとまりみろくの出世のあかつきまで永

衆生の善惡を見と、け理非明白に告しらせ」20ウ

申べしかならずうたがひたまふなとありしに

かはらぬ聲音にて高らかにこそ申けれ

炎王大きによるこび給ひ二人の首を連

墓へ乗置昼夜に側をはなさずして

理非善惡をきかけける是忠臣の随一なり

さればこそ末世の今にいたるまで見るめ

かく鼻ひたつの首淨婆利の鏡とて是ぞ

三惡第一のたからとこそは聞へけれ

不埒物語第七

大尾」21才

寶曆五^{乙亥}正月吉日

東都書林

日本橋通三町目

吉文字屋治郎兵衛

浅草御藏前

横田屋半治郎

神田八軒町

細工

小嶋 茂八